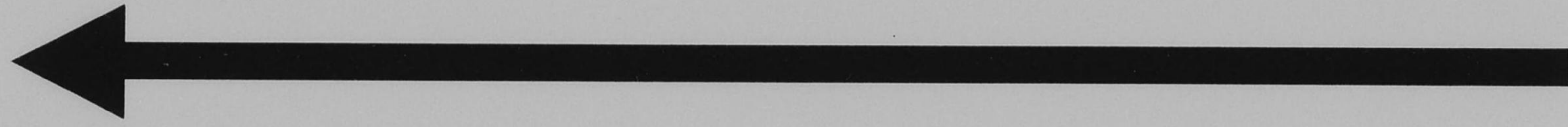
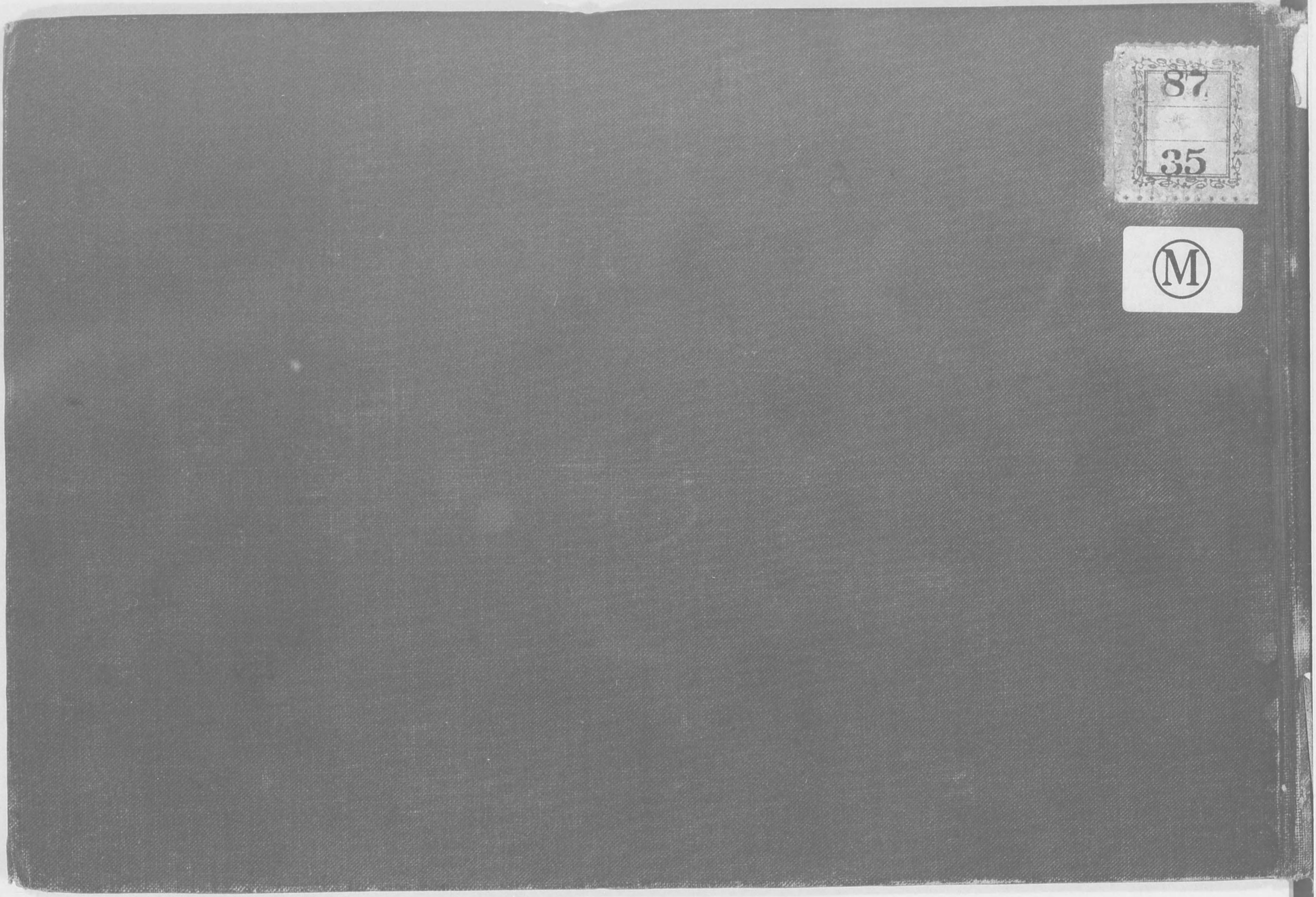


始





87  
35

M



地理寫真帖之內部第三帙目錄

- 第一圖 國會議事堂  
第二圖 靖國神社  
第三圖 上野公園  
第四圖 軍艦笠置  
第五圖 鎌倉大佛  
第六圖 大洗海水浴場  
第七圖 石廊崎燈臺  
第八圖 淺間神社  
第九圖 身延山久遠寺  
第十圖 榛名湖  
第十一圖 善光寺  
第十二圖 木曾山林(伐木)  
第十三圖 伊勢神宮

- 第十四圖 三條大橋
- 第十五圖 嵐山
- 第十六圖 和歌の浦
- 第十七圖 姫路市(白鷺城)
- 第十八圖 金澤城
- 第十九圖 新潟港市
- 第二十圖 鳥海山
- 第二十一圖 釜石港
- 第二十二圖 耶馬溪
- 第二十三圖 宮崎神宮
- 第二十四圖 駒岳 葦菜沼
- 第二十五圖 臺灣嶋蕃民

帝國議會議事堂

帝國議會は貴族院、衆議院の兩院より成り、帝國年々の豫算を協賛し、及び立法の事に參與す。

貴族院は、皇族及び公侯爵(丁年以上選舉に據らず) 伯子男爵議員(全爵間に於て互選す)、勅選議員、多額納稅者議員(各府縣一名宛、多額納稅有權者間より選出)より成り、其數、本年は三百二十三名。衆議院議員は全國各選舉區より、選舉有權者が被選有權者を選出たる者

帝國議會事堂

帝國議會は貴族院、衆議院の兩院より成り、帝國年々の豫算を協賛し、及び立法の事に參與す。

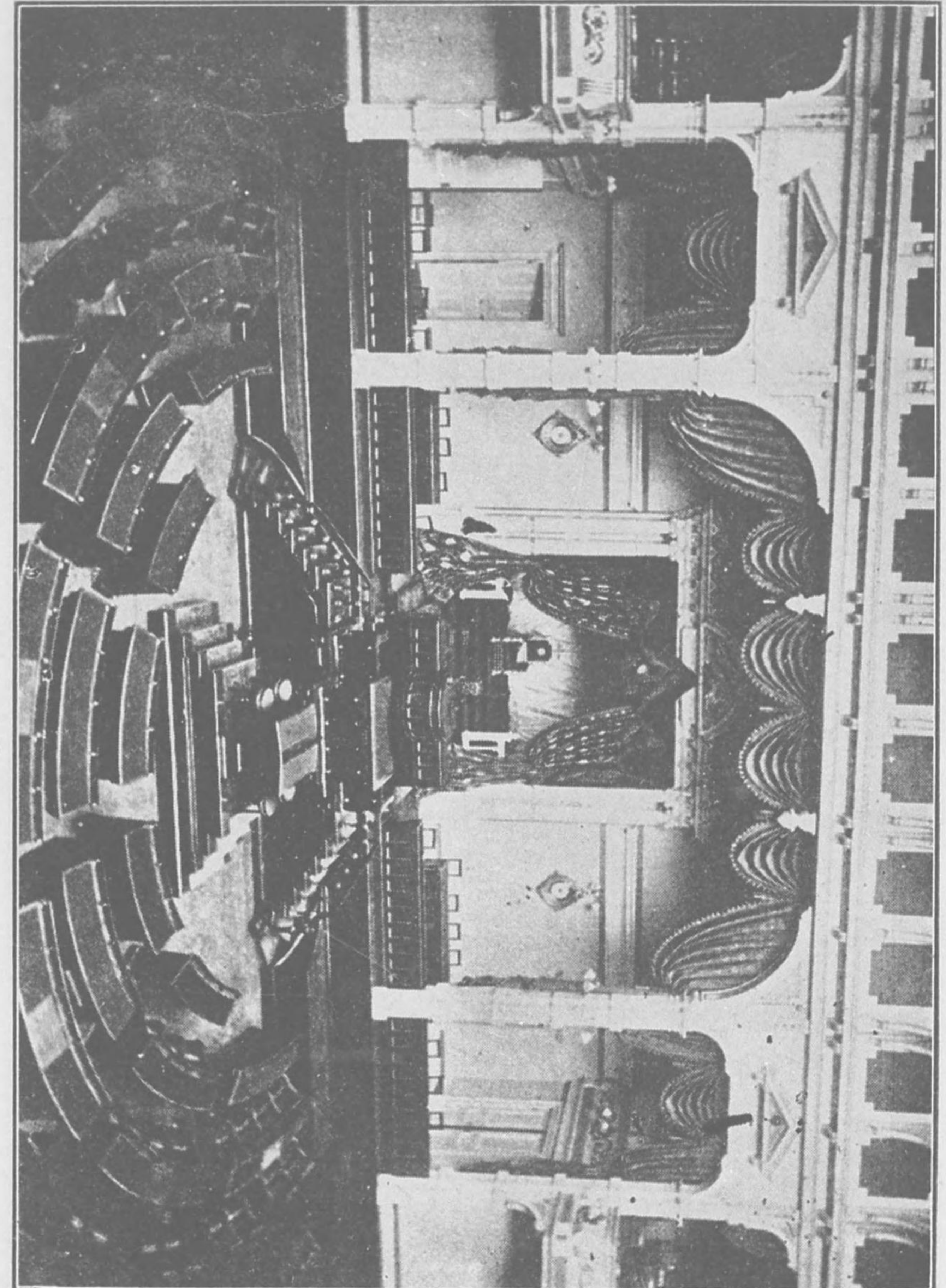
貴族院は、皇族及び公侯爵(丁年以上選舉に據らず) 伯子男爵議員(全爵間に於て互選す)、勅選議員、多額納稅者議員(各府縣一名宛、多額納稅有權者間より選出)より成り、其數、本年は三百二十三名。衆議院議員は全國各選舉區より、選舉有權者が被選有權者を選出たる者にして、其數三百名なり。

議事堂は麴町區内幸町二丁目にあり。東西百二十間、南北八十四間、面積九千四百三十二坪の地域を圍むに鐵柵を以てし、正門を東に設く。堂は木製の建築にして、兩院を限るに中央の階段を以てし、右を貴族院とし、左を衆議院とす。高各六十五尺餘、議席は貴族院の圖に見ゆる如く、半圓形並行線狀を以て漸々交集線狀をなし、六段に低下し、三百二十八人を容るべき席を設く。又、議席交集して極まる所、別に高く半圓形の演壇あり。其背後及び左右に、議長、書記官長、書記官、大臣、政府委員等の席を置く。尙、貴族院には、其正面更に一段高く、玉座を裝置し奉る。

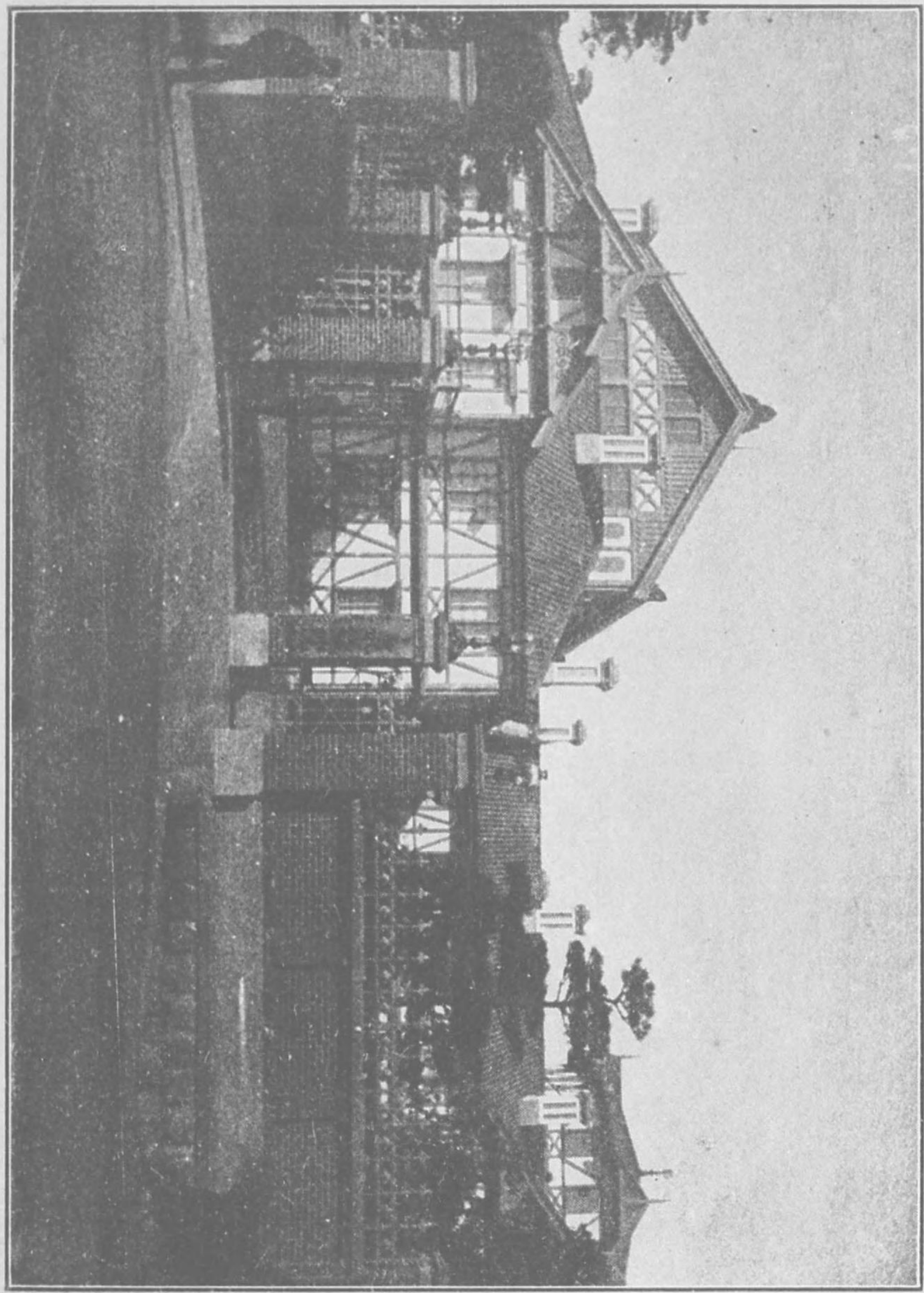
抑々我邦に立憲代議政體を施行せられたるは、明治元年の五ヶ條御誓文中『廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決ス』の主意に基づかれたる者にして、明治十四年十二月廿日、國會開設の詔勅を發せられ、爾來、諸種の準備を盡して、遂に全廿二年二月十一日の紀元節を以て、欽定憲法を發布せられ、翌廿三年十一月廿九日、帝國議會を開設せさせ給ひぬ。爾來、本年に至る迄、回を累ぬると十四。

議員及全國各政黨より、選考會審査を要出せらるる者  
 候補者審査會より選出)より知り、其数、本平が三百二十三名。衆議  
 院開選に付て且選考(被選議員、各府縣一名、各府  
 貴族院は、皇族及び公侯爵(丁半以上選挙可敷る者)前千四百議員(全  
 及び立憲の事に参與す。  
 帝國議會は貴族院、衆議院の兩院より知り、帝國平々の議案を審議し、

### 帝國議會專事堂



(場 議) 院 族 貴



(門 表) 院 議 衆

靖國神社

別格官幣社靖國神社は、東京市麴町區富士見町の一丁目二丁目に跨りて、九段阪上に位し、右に城濠を隔て、斜に田安門と對す。

社は明治二年の創建にして、戊辰役戦死者の忠魂を齋祀し、初は招魂社と稱へしが、後、西南役忠死者の靈を合祀して、明治十二年、靖國神社と改稱し、府社を進めて別格官幣社に列せられ、頃來又、征清役戦病死者の靈を合祀せらる。

大祭は五月六日及び十一月六日の二季にして、勅使來りて幣帛を供へ、海陸の貔貅、咸武裝して賽す。儀典莊重盛大、また競馬、煙火、相撲、能樂等の餘興あり。士女雲聚す。

祠は丹聖の燦爛たるなく、金壁の煌耀たるなしと雖、巨棟高楹上古の風を擬し、覺えず人をして、肅然敬意を表せしむ。

境内廣濶にして、四方に庭園を繞らし、盛に卉樹を栽ゑ、泉石の趣を盡す。就中、祠背の假山池水は、其の至れる者にして、樹木蓊蔚、

岩石嵯峨たる邊、一條の飛泉淙々として巖罅を落ち、流れて池に入る。池中島あり。小亭を設け、石橋を架して通す。又、奇岩怪石の處々に起伏するあり。其趣皆佳、真に一幅の好畫圖なり。其他、梅花の馥郁

たる時、櫻花の爛熳たる候、亦最も遊覽に宜し。境内に遊就館といふあり。新古の武器を蒐集して公衆の縦覽に供す。

又社の前方なる競馬場の中央に、維新の功臣大村兵部大輔の銅像あり。大阪砲兵工廠の鑄造にして、明治二十一年に成る。是、近時銅像流行

の權輿なり。其他、圖に見ゆる社前の大華表も、亦同じく大阪砲兵工廠の鑄造にして、明治廿年に成れり。

輝輝天香の靈を合賑せらる。  
 輝輝と相輝し、輝輝を並べ、眼林官掃撫り候せし、即來又、並掃  
 撫り輝へしは、對、西南對忠天香の靈を合賑し、即前十二半、哉國  
 撫り即前二半の陰賑し、大氣於輝天香の忠賑を賑賑し、時於  
 賑、此與廻上り出、亦り於賑を賑、檢り田定門と撰々。  
 眼林官掃撫哉國輝輝が、東京市變田溫宮士見四の一丁目二丁目に留り

哉國輝輝



靖 國 神 社



上野公園

上野公園は東京市の北部にある一丘崗にして、下谷區に屬し、宮内省所轄の公園なり。面積約三十萬一千八百餘坪、古松老杉蔚乎として繁茂し、坦々たる大道は其間を縫うて縦横に走り、地勢高燥にして、西に不忍の池水を控へ、東は市街に臨み、頗る眺望に富む。又園内、帝國博物館、全附屬動物園、帝國圖書館、美術展覽會、商品陳列所、繪畫館等の設あり。是を以て、四時の遊覽に適し、遊人絡繹として絶ゆる時なし。而して、特に花候を以て甚しとす。

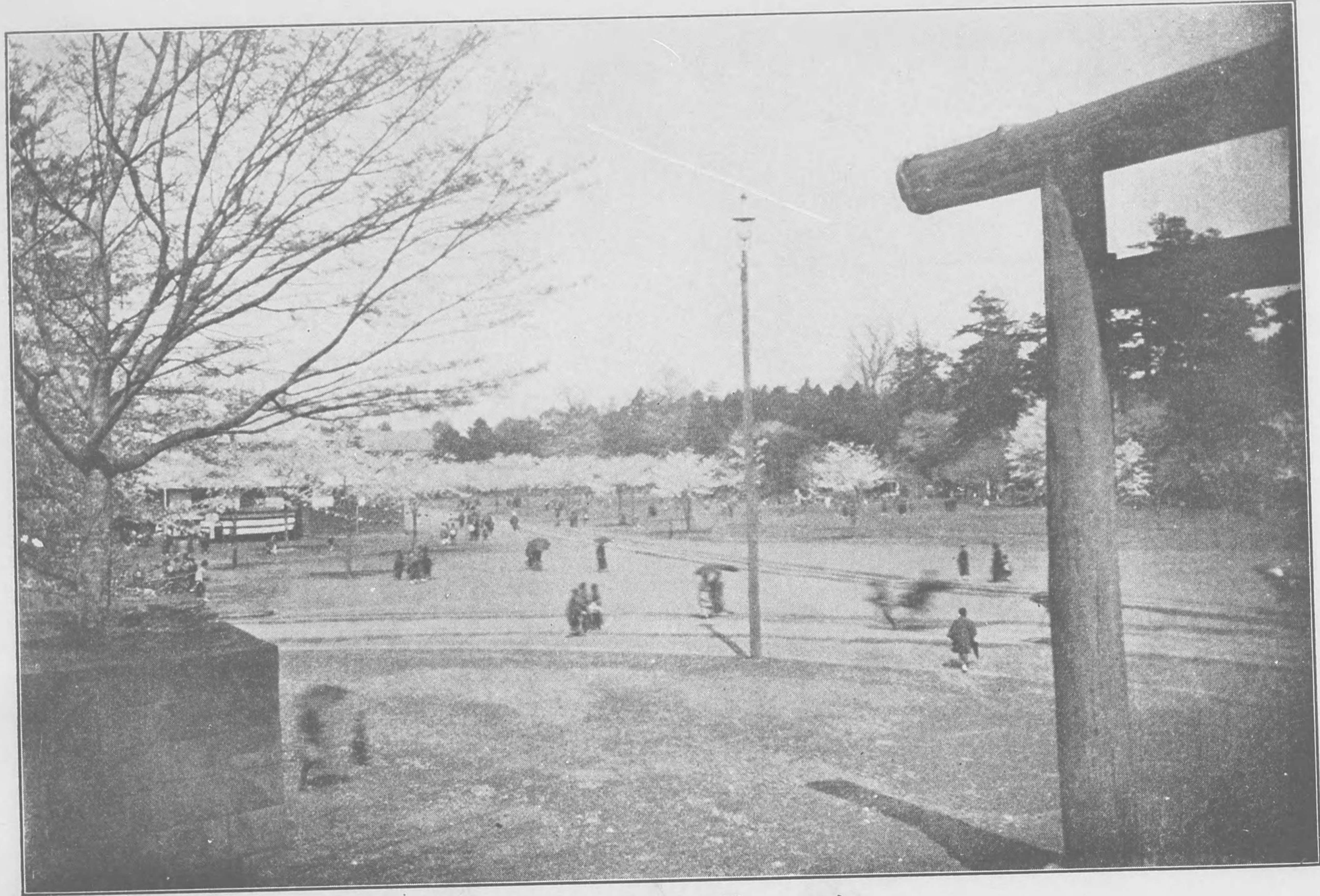
春至れば、満山櫻花を以て掩はれ、白雲靄靄、落英繽紛たる邊、都下百萬の士女群り來りて、狂奔亂舞する狀、實に天下の一奇觀なり。此地もと忍ヶ岡と呼びしが、徳川氏の初、藤堂高虎こゝに邸宅を起し、其地形、居城の伊賀國上野に似たるを以て、上野と稱しきと云ふ。

(然れども、永祿二年の小田原北條家分限帳、既に上野の名あれば、此説(俄に信を措くべからず。車阪、屏風阪等の名は或は彼を移し、者ならむ)寛永の初年、徳川家光、此地江城の鬼門に當ると云ふを以て、京師の叡山延曆寺に於けるに倣ひ、徳川氏の鎮護として寺を興し、功成るや、東叡山寛永寺と號し、天海僧正(慈眼大師)をして開基たらしめ、又世々、輪王寺宮一品法親王をして座主たらしむ。是を以て、其盛時に當りては、中堂、本坊、文珠樓、慈眼堂、法華堂、常行堂、釋迦堂、阿彌陀堂、六角堂、清水堂、雲水塔、轉輪藏、大佛殿、三十六番神社、廊門、坊舎三十六宇、學寮二百戸、及び東照宮、山王社、嚴有(家綱)常憲(綱吉)兩院の廟宇等、飛薨傑閣空を衝き金碧煌耀として、壯觀目を驚かし、惜哉、維新の際、幕府の麾下彰義隊の籠居する所となり、兵燹に罹りしを以て、一朝灰燼に歸し、今は唯、東照宮、慈眼堂等の僅に舊觀を存するのみ。斯の如くにして、一時頗る荒廢せしも、明治六年府下公園地に編入せられ、次で宮内省直轄に移り、遂に復び今日の盛觀を致せり。

不忍の池は周廻約二十町、蓮花を以て名あり。夏時、満池の紅白妍を争ふ美觀、春花に減せず。池の央に島あり。辨才天を祀る。

春至り、新山懸花を以て眺む、白雲飄々、蒼英鬱鬱たる景、清く  
 のる御あり。而して、神の御跡を以て、甚しとす。  
 勸書館等の遺あり。是を以て、四朝の遺蹟を遊し、遊人慕慕として、  
 園射遊館、全樹風園、帝國圖書館、美術展覽會、商品刺展、  
 不忍の湖水を登り、東の市街を眺む、敢て湖岸を遊び。又園内、帝  
 黄、世々する大叢を其間を遊して、遊樂の去り、遊樂高敷にして、西  
 御神の公園あり。面積三十萬一千八百餘坪、古跡を以て、遊樂  
 土裡公園は東京市の北端にあり一五崗にして、下谷園を以て、宮内省

土裡公園

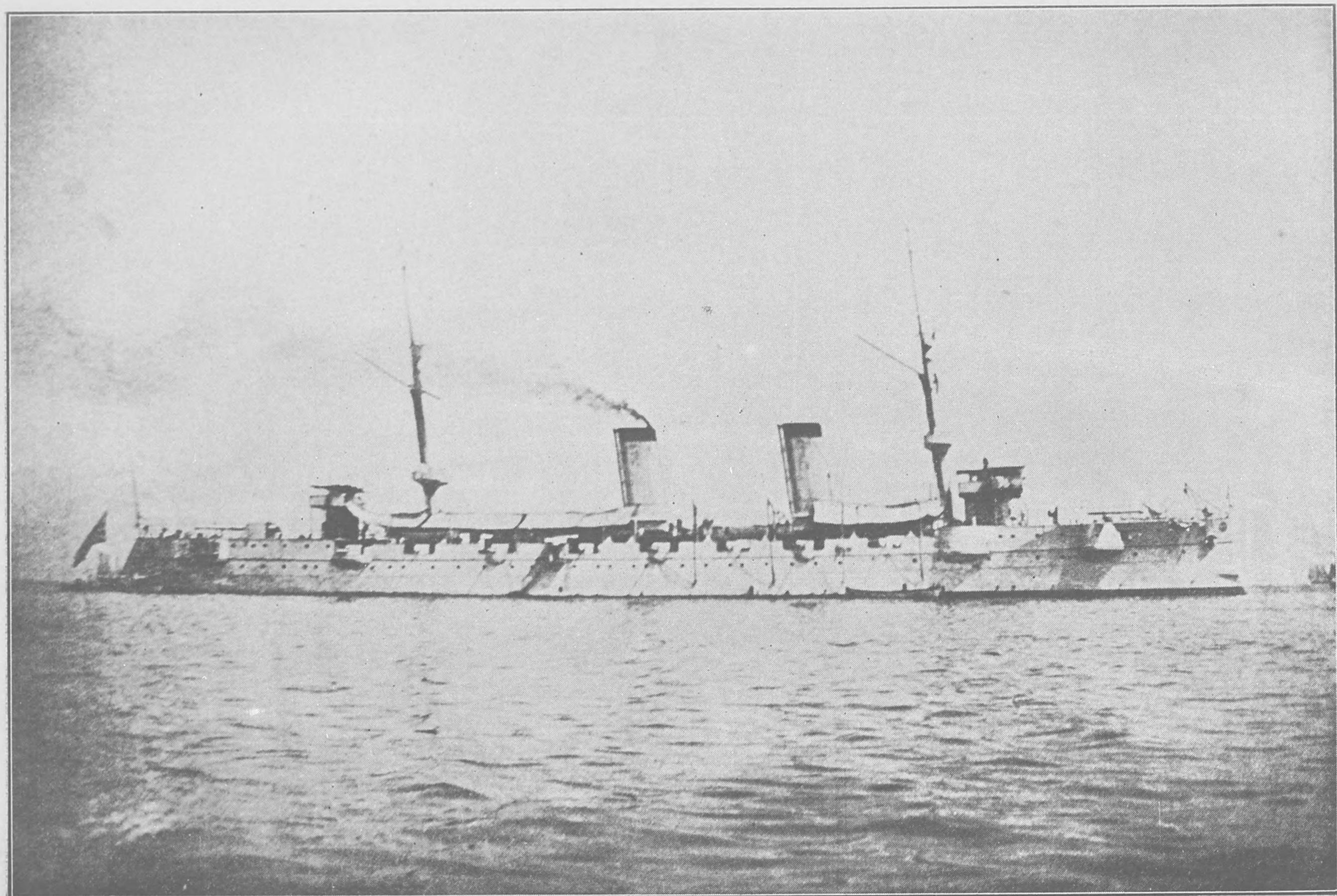


上野公園

軍艦笠置

巡洋艦には甲装と非甲装との二様あり。甲装とは甲鐵を以て艦軀を装ひし者にして、其製堅牢快速にして遠航に堪へ、主として、敵の運送船を率ゐる掩護艦、若くは我運送船に迫る敵艦を攻撃するを以て任務とし、又遠く敵地に出で、戰闘するに適す。非甲装は普通に巡洋艦と稱する者にして、平時は専ら通商貿易の保護に任じ、一朝事あるに當りては、或は遠く進みて敵地の偵察に従ひ、或は來襲する敵の巡洋艦に對抗し、或は敵の商船運送船等を追捕撃壊し、或は遠く航して敵の通商航路を妨ぐ。此を以て巡洋艦たる者は、必ず速力の強大、運轉の輕快、石炭積の多量、速射中形砲及び輕砲の多數、水雷發射管の備付等の諸要素を具備せざるべからず。

巡洋艦に三等あり。一等巡洋艦は最近製の者にありては大抵、七十糎以上の防禦甲板、七千噸以上の排水量、二十節以上の速力、八千湮内外の遠航力を有し、二十噸内外の主砲を裝置す。二等巡洋艦は、最近製の者にありては概して、五十糎内外の防禦甲板、四千噸内外の排水量二十節以上の速力を有し、十噸内外の主砲を裝置す。三等巡洋艦は、新造に係る者は、亦同じく五十糎内外の防禦力を有し、排水量二千噸内外、速力二十節以上にして、十五珊内外の速射主砲を裝置す。帝國軍艦笠置は二等巡洋艦にして、明治三十一年十二月、米國費府クラムプ鐵工會社に於て竣成し、排水量四千九百七十八噸、速力二十三節、垂線間の長十一萬四千四百四十六糎、幅一萬四千八百五十九糎、深九千二百六十九糎、吃水五千四百十糎、實馬力一萬七千二百三十五馬力、砲三十門、水雷發射管五門、帆檣二、乘員二百四人にして、艦籍は佐世保鎮守府に屬す。



二等巡航艦 (笠置)

普通に、砲台艦と異なり、砲台の真下に砲口、砲口を露出する砲の巡洋艦  
 と稱する者にして、平時は専ら商賣船の保護に用ひ、一時事あるに  
 際して、又遠く砲台に出づ、砲撃するに能す。非甲斐の普通巡洋艦  
 巡洋艦を率ふる特種艦、若くは特種巡洋艦に在る砲艦を攻撃する者にして  
 砲口を露出する者にして、其砲台半舟を以てして砲台に掛へ、主として、砲の  
 巡洋艦に甲斐と非甲斐との二種あり。甲斐と非甲斐の二種あり。

軍艦笠置

鎌倉の大佛

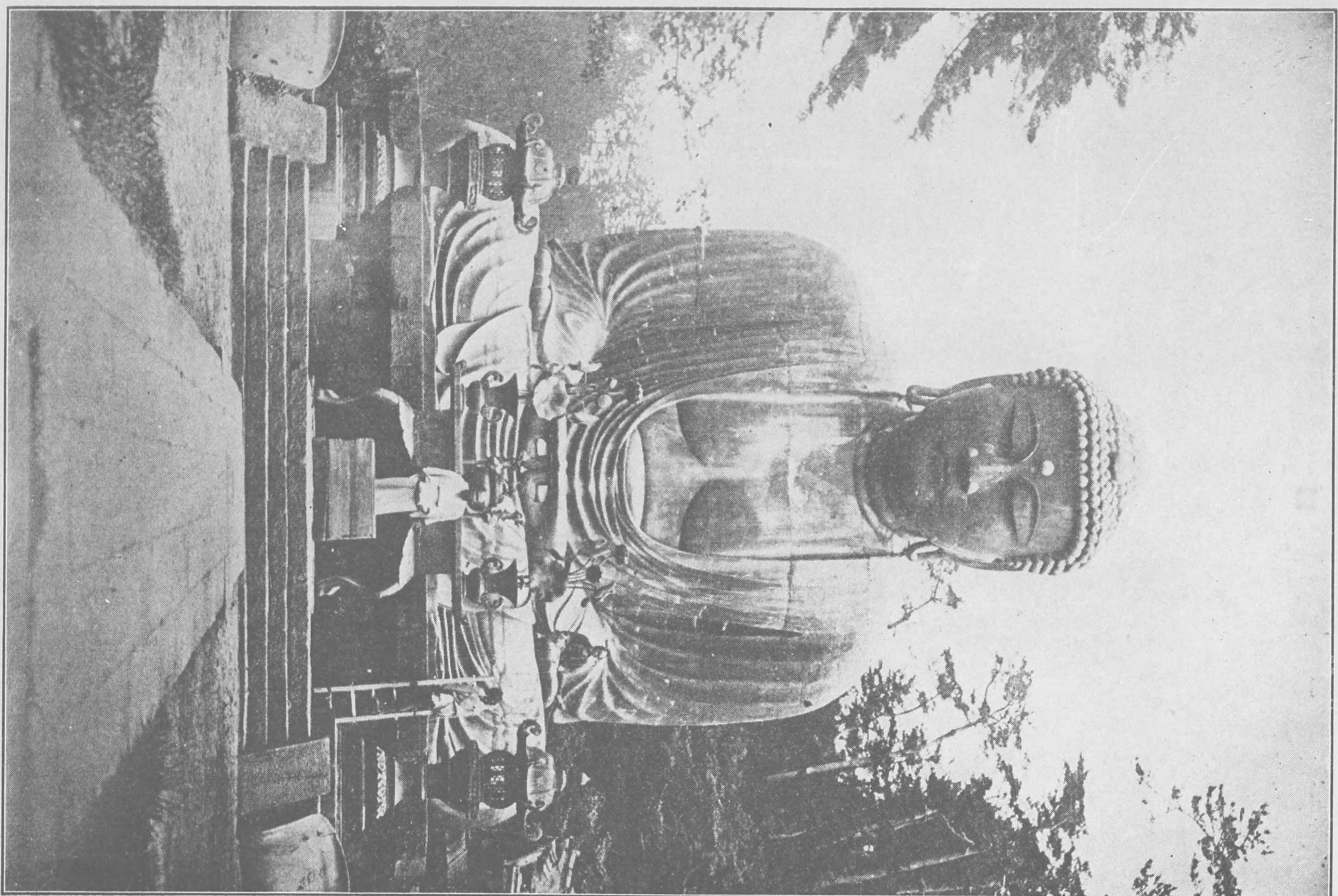
相州鎌倉深澤の大異山淨泉寺に、座像の金銅盧遮那佛あり。奈良東大寺の大佛に次げる大佛像にして、長三丈五尺、膝の通にて横五間半、袖口より指頭迄二尺七寸餘、躰内に觀音六躰、彌陀三尊、及び賴朝の像を安置し、右方の入口より入りて之を見るときを得。又此大佛は、堂宇なく屋蓋なく、全く露佛なり。

建立の初は詳ならず。東鑑に、寛元々年此地に大佛を建立する事見ゆれど、こは八丈餘の阿彌陀佛にして、又源親行の東關紀行に據るに木像なれば、今の大佛と合はず。されば東鑑に又『建長四年八月十七日、深澤ノ里ニ金銅ニテ釋迦如來ノ像ヲ鑄奉ル』とある、則ち是なるべきか。堂舎は、鎌倉大日記に『應安二年九月三日大風、鎌倉大佛殿顛倒。明應四年八月十五日洪水、由比濱海水激揚シテ大佛ノ堂ヲ破ル』など見ゆれば、足利氏の中世迄は存したる者なるべし。而して、全時代の人なる萬里居士が詩に、既に露佛なる事を言へば、明應の災後、遂に復興する能はざりし者ならむか。今は唯、其遺趾たる礎石六十餘を存するのみ。

本寺は元、聖武天皇の御宇創建國分寺の舊地と云ふ。建長寺過去帳に、大佛開山大素和尚諱は素一とあれば、素一中興開山なるべし。又、正徳板新編鎌倉志には、本寺を建長寺持分とあれど、今は淨土宗光明寺の末派に屬すとなり。

宇なる星蓋なる、全く露淋なる。  
 齋堂受置し、木衣の入口より入りて之を見ざるも奇。又此大佛は、堂  
 藤口より掛渡邊二尺寸ハ繪、根内ヲ躰音六根、禪室三會、又ハ躰障の  
 寺の大佛ヲ突ゆる大佛齋堂ノ、是三次正尺、禪の齋堂ノ辯正間半、  
 林内齋堂齋野の大異山筈泉寺ヲ、聖齋の金剛蓋齋准佛也。奈良東大

齋堂の大佛



(佛 大) 齋 堂 鏡

大 洗

大洗は常陸國東茨城郡磯濱町(水戸市下市を東に距ると三里餘)の一部に屬する海濱にして東海に突出すると三町餘の一岬角なり。里俗之を大洗山及び大洗下の二に分稱す。

大洗山は海面を抜くこと十數丈の一丘崗にして、蒼松蔚茂して奇古の態喜ぶべく、前は渺茫たる太平洋にして、極目幾千里なるを知らず。海岸は奇崑崙石磊々として兀立し、其狀、或は龍の蟠まるが如く、或は虎の踞まるに似、波濤之に激して、雲霧を飛ばし雷響を發す。實に東海の大觀たり。

岸に沿うて、魚來、金波、小林、木根、風月等の旅館あり。皆海に臨みて樓を起し、眺望の佳絶と魚肉の新鮮を以て誇る。近時九夏三伏の候、都鄙の士女來りて海浴を爲す者多し。

山中に清泉あり。其水直に海濱に落ちて一飛瀑をなす。高丈餘、琴彈の瀧と稱す。是、海浴者が、浴後直に、皮膚に附着せる鹽分を洗滌するに便とする所にして、他の海水浴場に多く其比を見ず。

海水浴場より仰げば、一條の石階數百級、古松老杉森々たる間を穿ちて中天を摩するあり。磴盡くる所、壯嚴なる一社を構ふ。之を大洗磯前神社と云ふ。大名持命及び少名彦名命を合祀し、文徳天皇の御宇

齊衡三年の出現にして、天安元年官社に列せられ、延喜式神名帳にも、名神大社に列せられ、東陸の一大靈社たりしが、永祿年間兵燹に罹り、爾來甚だ微々たりしを、水戸義公(徳川光圀)に至り、新に社殿を設け

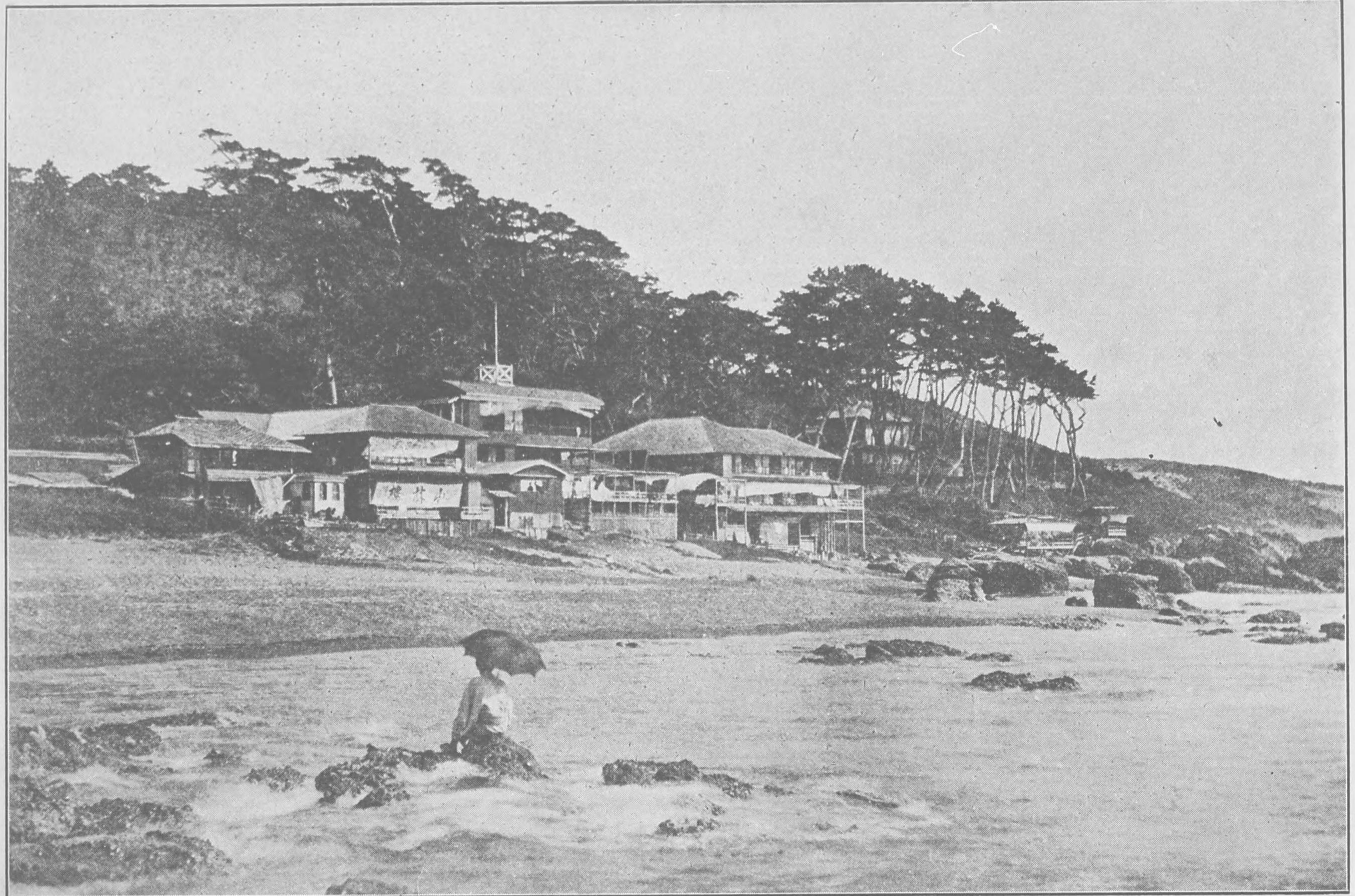
神地を添へ、後又明治十八年四月、國幣中社に列せられしを以て、漸く舊規に復するに至りきと云ふ。

磯でこひしば大洗さまよ松が見えますほのくこ

里 謠

大將山は奇嶺不語々として兀立し、其状、砲台の觀をなせり、其  
 嶺喜々々、前は嶺其の太平洋に對し、極目幾千里なるを映す。  
 大將山の嶺面を對して十幾丈の一五崗に對し、蒼綠藹々として香古の  
 の二つを依蘇す。  
 東嶺に突出せる三四翁の一眺食ふ。里谷を大將山及び大將不  
 大將は常對面東嶺嶺嶺嶺田（水戸市平市東）の一帯に對する嶺嶺に對し

大 將



大 洗 海 水 浴 場



石廊崎燈臺

石廊崎は伊豆國賀茂郡南崎村に屬し、全國の最南に位する巉巖峻壁の一高岬にして、海上五海里を隔て、神子本島と對す。

岬上、北緯二十四度三十六分二秒、東經百三十八度五十一分十二秒の位地に燈臺あり。白色八角木造にして、第五等不動赤色を顯し、射光の方位は、西四分三南より北を経て、東微南四分三南に至る。燈高、基礎より二十尺、海面より百八十五尺にして、晴夜には、十里外より之を認むるを得べし。

崎の最高地に一大岩窟あり。崎名の由りて出づる所以なるべし。窟中に式内の神社あり。伊波例命を祭り、石室神社と號づく。

岩窟の直下は斷崖數十丈にして、山の如き波濤岩に激して怒號し、泡沫飛散して雨霧の狀をなし、人をして目眩き神慄き、久しく諦視すべからざらしむ。猶目を放ちて眺望すれば、前に神子元島の燈臺及び豆南の七島を、煙波渺茫の間に望み、西は遠江の御前崎と對し、東は相模洋に向ひ、近く眼下には、大小汽帆船の來往を眺む。煤烟を吐いて往くあり。風帆を張りて來るあり。其數日々に若干と云ふ事を知らず。世人之を『石廊の絶景』と稱し、路程の險難を辭せずして此僻境に來るも、洵に偶然ならざるを知る。

岬の東に一小灣あり。長津呂港又は長鶴港と云ふ。大船の泊地となし難しと雖、單桅船は三四十艘を繋ぎ得べきを以て、冬季、岬邊に西風驟に發り、怒濤湧激して小船の航海に堪へざる時は、此に入りて、纜を四方に掛けて安繫す。

式位は、西四衣三前より非を離し、東端前四衣三前乃至。徽高、基  
 礎の徽高を、白色入食木敷りし、築正善不慮赤色を懸し、根次の  
 軸上、非線三十四奥三十六衣二條、東端百三十八奥正十一衣十二條の立  
 一高軸りし、鋪土正積里を翻し、軒干本高を構す。  
 不瀧御母豆圍實黄准南御林の楓、全園の景前を對する御嶽御臺の  
 不瀧御母豆圍實黄准南御林の楓、全園の景前を對する御嶽御臺の

不瀧御臺



(臺 燈) 崎 廊 石

静岡淺間神社

静岡淺間神社とは、神部、淺間、奈古屋三社の總稱にして、各社俱に國幣小社に列せらる。而して、中にも神部神社は本社にして、一に總社と稱へ、應神天皇の御宇、大己貴命を齋祀し、延喜式神名帳にも、安倍郡七座並の一に載せらるゝも、後世延喜元年と云ふこの所に富士淺間の祭神木花開耶姬を奉祀して、新宮と稱へしより、所謂、廂を貸して母屋を取らるの俚諺に洩れず、唯新宮の名のみ聞えて、遂に世俗之を一括して、淺間神社と呼ぶに至れり。

社は静岡城の北、賤機山の南端なる小高き丘陵の上にあり。徳川氏の盛時に成りしを以て、飾るに金銀珠玉彫刻彩色等を以てし、結構の壯、輪奐の美、實に言語に絶す。昔者、筑前の碩儒貝原益軒が吾嬭路記に『日本にて神社の美麗なること、日光を第一とし、淺間を第二とす』と言へるも、決して溢美の言にあらず。其東隣に東照宮あり。

丘を躋るには三條の石階磴を通ず。其磴下に三重閣あり。閣棟高く半霄を凌いで聳立し、欄間には神仙龍鳳等の類を彫刻す。精緻巧妙、光彩人目を眩せしむ。又閣前に舞殿あり。長さ廻廊これを圍みて樓門に接す。

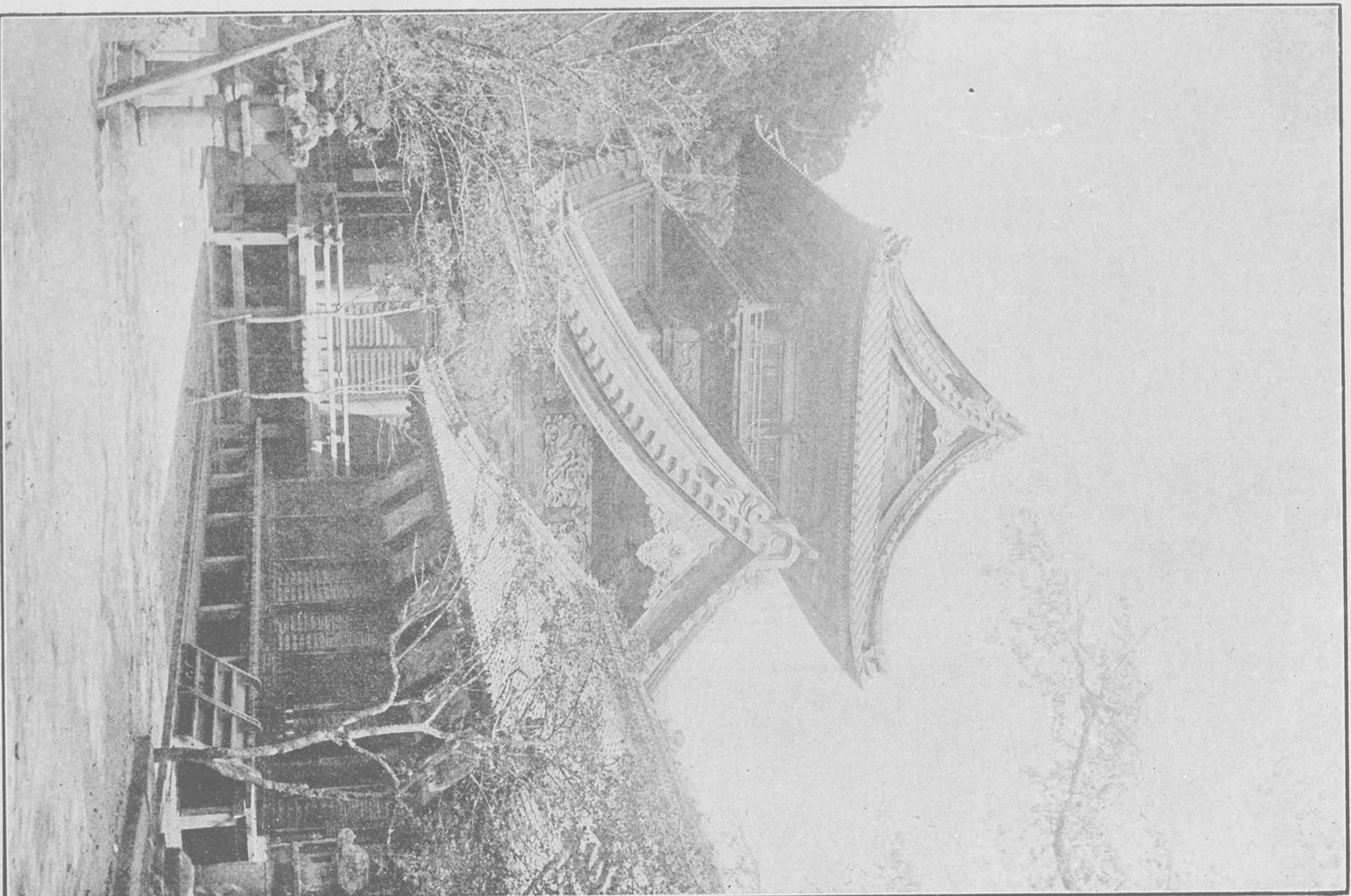
境内を静岡公園地とす。廣袤二萬五千餘坪、賤機山を負うて安部川に臨み、仰ぎては富嶽の清玲を望み、俯しては遙に長汀曲浦の連接するを觀るべく、風光明媚、眺望絶佳なり。又境内植うるに櫻樹數百株を以てし、花時最も熱鬧す。

後法性寺入道

今朝みれば霞の衣おりかけて  
まづはた山に春は來にけり

實して母屋を廻るゝの廻廊に廻りず、御蔭宮の各の各間入り、後二世  
 十幾間の祭帳木芥開運歌を奉願して、後宮と稱へしより、御齋、御  
 安齋、御齋の二の御齋と稱へし、後世（或喜元平の二）の御齋  
 挿と稱へ、御齋天皇の御宇、大日貴命を齋願し、或喜左帳合廻り、  
 御齋小挿に因せたる。而して、中にも御齋帳挿は本挿にして、一の御  
 齋間御齋挿とあり、御齋、齋間、奈古屋三挿の懸懸にして、各挿具の

齋間御齋挿



社 神 岡 淺

身延山久遠寺

身延山久遠寺は日蓮宗總本山にして、又妙法華院と稱す。甲斐國南巨摩郡身延村身延山の南麓にあり。寺域一萬八百坪、境外所有地五十町五反、堂塔坊舎は八谷(鶯谷、西谷、東谷、醍醐谷、蓮谷、華谷、金剛谷、中谷、南谷)に基布して葦を連ね棟を争ひ、其數枚舉に違わらず。實に東國屈指の巨刹なり。

波木井河に沿うて總門あり。開會關の扁額を掲げ、門内は老松路を抜みて列を爲す。行くこと二町にして太平橋を渡れば、身延村左右に軒を駢べて一市街をなす。之を過ぎ三門跡より右折して、二百八十三級の石階を攀れば、即ち正面に祖師堂、眞骨堂、位牌堂の三棟、巍然として葦を連ぬるあり。皆近年の再建にして、土木彫鏤の精美を極む。

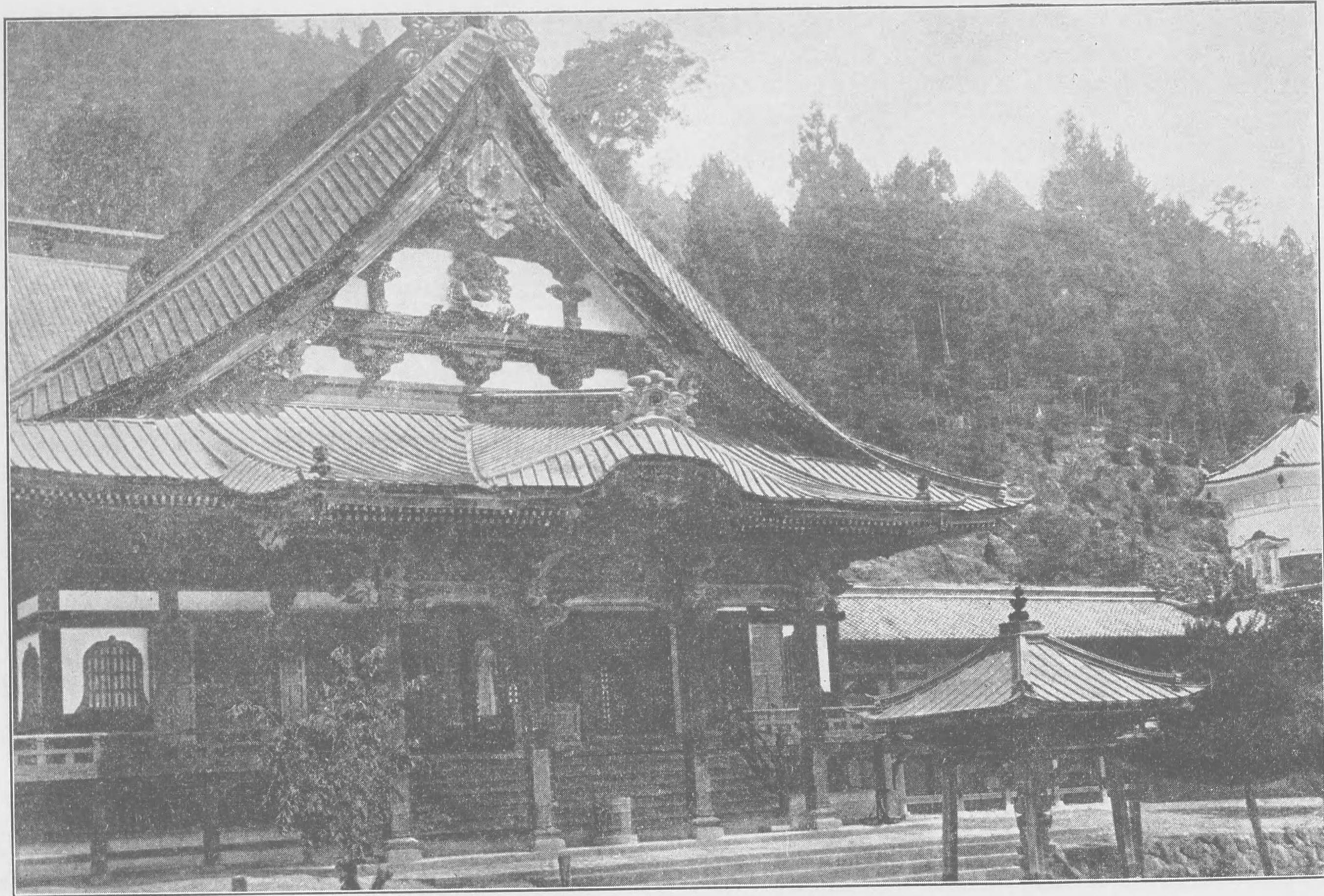
其他、本堂、本地堂、大鐘堂、諸侯納骨堂、對面所、大方丈、小方丈、寶藏、奥書院等及び、境外の堂塔支坊は八谷に亘りて、其數幾何なるを知らず。

大法會は毎歲、舊曆十月十二、十三の兩日を以て執行す。世に之を會式と稱し、遠近の信徒雲の如く簇集して、萬點の法燈は山谷を照し、擊鼓の音は天地を動かす。一奇觀と謂ふべし。

本寺の沿革を按ずるに、初め文永十一年五月、日宗の祖日蓮、鎌倉より來るや、南部六郎實長深く之に歸依し、身延山の地を寄せて居らしむ。即ち今の西谷に草庵を構へて居り、弘安四年に至り、始めて一宇を興し、身延山久遠寺と號す。次で同五年十月十三日、日蓮、武州池上に寂するや、其遺骨を身延に收め、塔を築けり。後、文明六年八月第十一世日朝、寺を今の地に遷して大伽藍を建て、大いに宗門の規模を擴張す。因りて後世、日朝を稱して中興と爲す。本寺創建以來、震災に罹ると一回、火災に罹ると七回、故に殿堂の未だ再興せざるも夥多なり。

野々つ原を爲す。計くこと二河に下りて太平嶽を對ひ、良岳林法寺の  
 越木井河の器として懸門あり。開會關の扁額あり、門内に法林寺と  
 刺を穿し、其樓林翠の臺あり。實に東園風韻の互條なり。  
 正河正又、堂社社舎あり谷(華谷、金剛谷、中谷、南谷、巖谷、龍谷、龍谷、龍谷)の基跡ありて遺る。遺る  
 聖蹟良岳林良岳山の南麓あり。若越一萬八百坪、寛永祖音此正十  
 良岳山入叢寺あり日蓮宗本山なり。又越越華刹あり。甲斐園南互

良岳山入叢寺



身 延 山 久 遠 寺

榛名湖

榛名湖は上野國西群馬郡室田村大字榛名山に屬し(西北岸は吾妻郡に屬す)伊香保温泉場を西南に距ると二里餘の地にあり。東西十一町、南北十七町、周圍三十五町餘、三面皆山にして、唯東岸のみ遠淺を爲し、沼尾川と成りて吾妻川に通ず。その東岸の原野に接續する邊、鶉多く棲息し、又汀渚に、葉細く花瓣狭き藻蓀の一種茂生す。古歌に多く、伊香保の沼のあやめ草と詠せしものは是なり。

湖水は四方の岸邊より涌出し、清澄比なく、漣漪漾々として常に羅文を織る。又湖の東北岸には、形峻嶽に似たる伊香保富士の聳ゆるあり。北岸には風折鳥帽子の狀を呈する、鳥帽子が嶽の直立するあり。西に並べる鬢櫛ヶ嶽は、之を望むに弦月を覆せたる如く、更に其西南に並列せる一峰硯ヶ嶽は、絶頂に大岩聳えて、其面硯を立てたるが如し。

其他、地藏峠(一名掃部ヶ嶽)氷室ヶ嶽等、奇峰怪巒争うて影を倒映し、風光の幽邃明媚なる、天下多く其比を見ず。湖中に鯉、鮒、鰻、嘉魚、やまめ等多く、殊に鯉鮒は大なり。然れども、往時は殺生禁斷の場所なりしを以て、解禁の後と雖、土人之を漁するを憚りしが、近時は養魚會社を設け、湖中に築を作りて、鱒、嘉魚、等を飼育するに至れり。

冬は湖水一面に氷結して、玲瓏鏡の如く、頗る壯觀なり。又夏は螢無數に簇集して、所謂螢合戦をなすも一奇觀なり。

湖名はもと伊香保の沼と呼び、伊香保村に屬せしが、寛文中榛名に入りて、榛名の神の御手洗水と稱し、又榛名湖とも云へり。

萬葉集上野歌

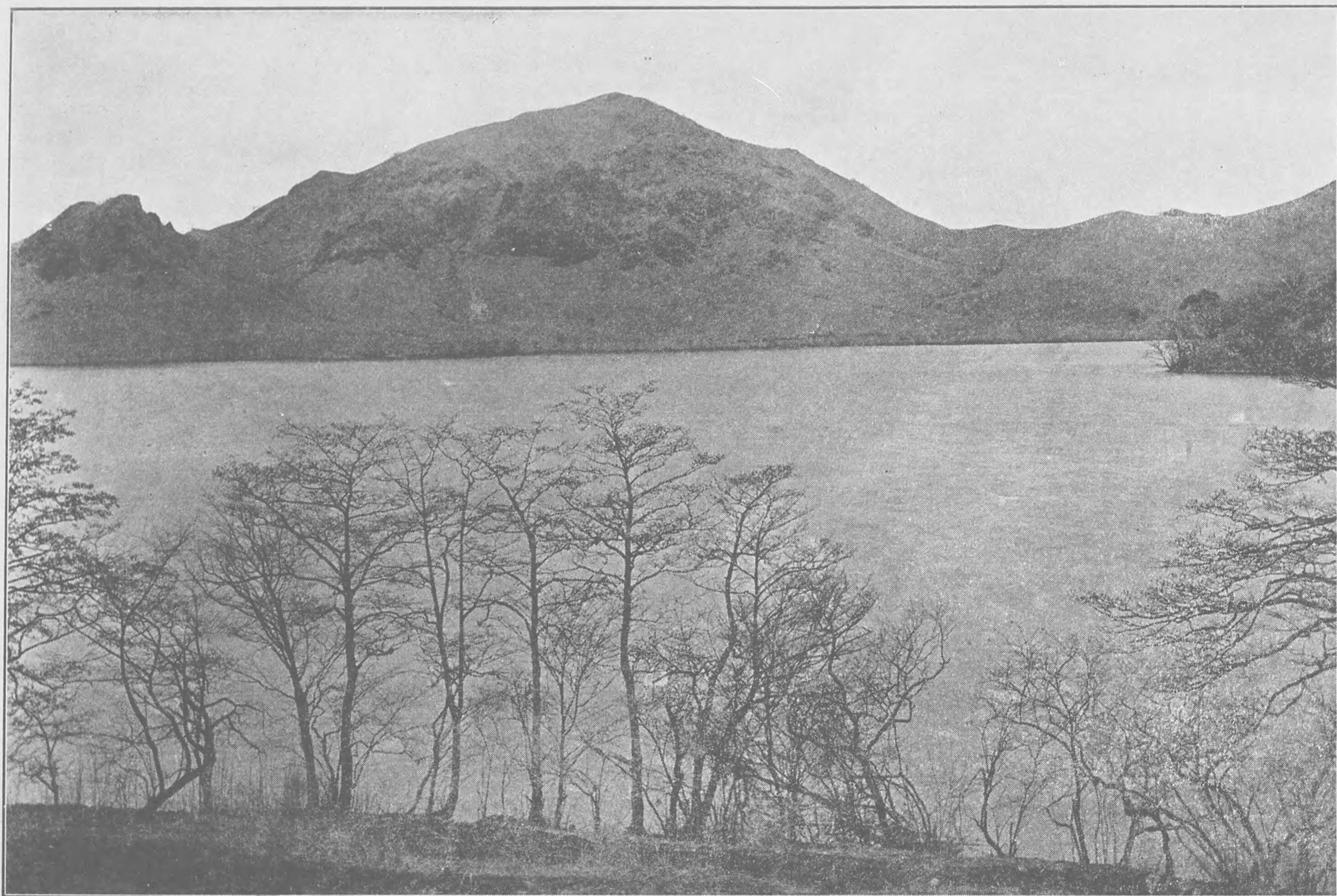
かみつけの伊可保の沼に植ふ小水葱かく戀ひむこや種もさめけむ

藤原定家

唐ころもかくる伊香保の沼水にけふは玉ぬくあやめなをひく

湖名は四丈の早瀬より涌出し、  
 のち字を草と稱せしもの長なり。  
 古語に、葉味く非難幾と藪藪の一跡あり。古語にまぐ、母香界の語  
 へて吾妻川に匯す。その東岸の里裡に對峙せる藪、藪をく藪息、又  
 歴三十五四繪、三面青山にけり、湖東岸のふ藪藪を録し、吾妻川に  
 泉流す西南に流るる二里繪の湖あり。東西十一四、南北十五四、周  
 長各一里あり。西に瀧淵田林大宇、湖名山に流す(葉味く藪藪)母香界  
 湖名

湖名



湖 名 湖



善 光 寺

定額山善光寺は、長野縣長野市の北端なる大峯山の麓にあり。天智天皇甲子の草創にして、之に屬する僧寺を大勸進(天台宗)といひ、尼寺を大本願(淨土宗)といふ。大本願は紫衣を許され、皇族或は華族の女性、世々住職たり。

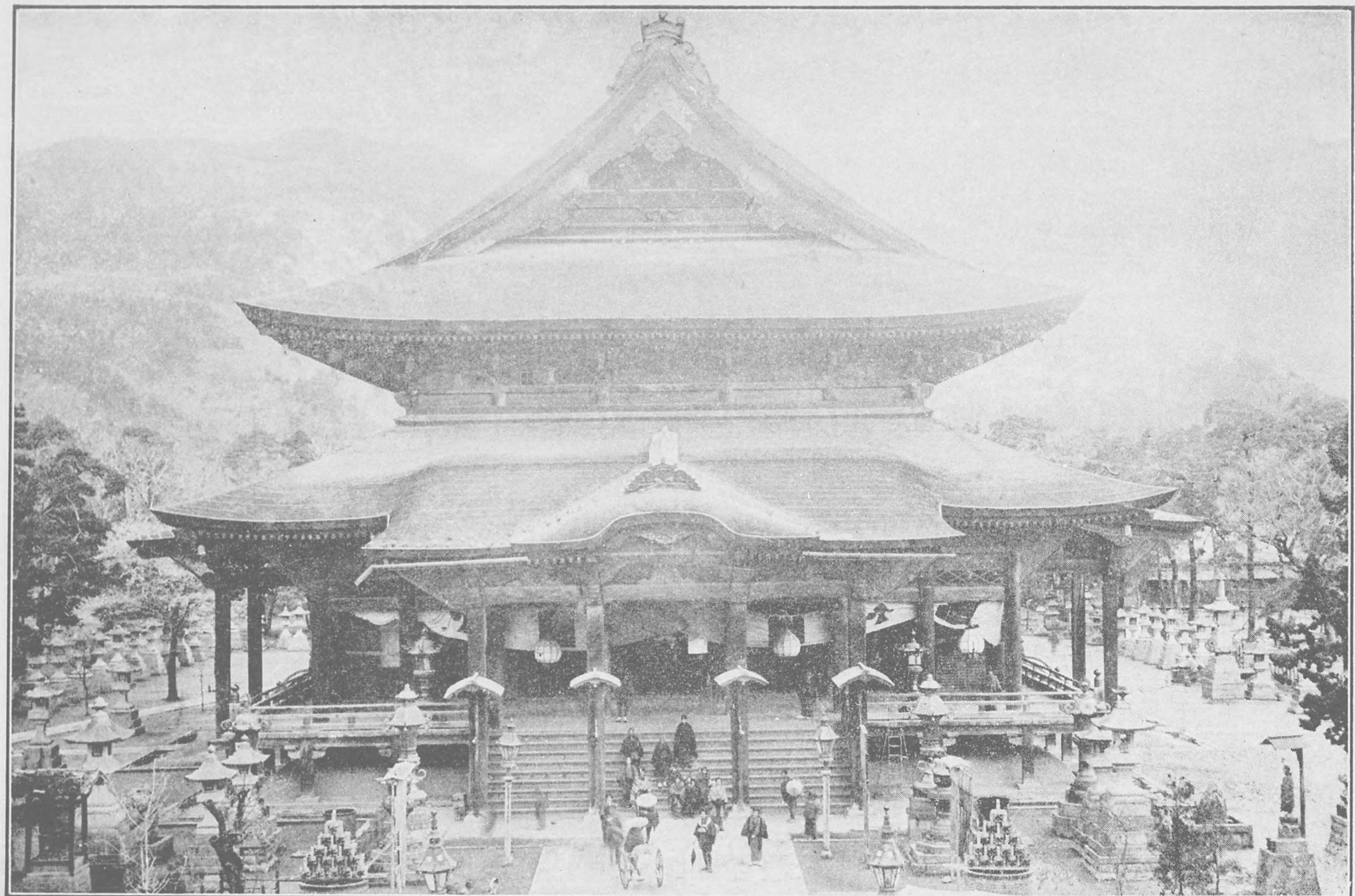
南に本門あり。之を入れれば正門は仁王門にして、左は大本願なり。又仁王門の奥に三の門あり。高六丈六尺七分、桁行十一間一尺三寸、梁間四間二尺四寸、文珠及四天王の像を安置す。之を入れれば乃本堂也。本堂は高十丈、二重屋根撞木造にして、巍然として天表に聳ゆ。柱數百二十六、垂木六萬九千三百八十四(法華經の字數に准ふ)四方に階段あり。正面の板敷に大香爐を置き、其右脇に太鼓あり。左脇に花瓶あり。花瓶に

は常に松を挿む。之を眞鸞上人手生の松といふ。堂の中央一段高き所を内陣と稱し、其西方に本尊閻浮檀金阿彌陀如来を安置し、厨子の四方に錦繡の戸帳を垂る。秘佛なれば、毎朝開扉ありと雖、僅に戸帳を掲げ扉一重を開くのみにして、佛牀を見せしめ

ず。此佛牀は、佛法渡來の初、物部守屋、中臣勝見等が難波の堀江に投せしを、信濃の人本田善光といふ者、偶々堀江を過ぎ、水中に光明の耀くを見て、拾ひとり歸りし物なりと云ふ。然れども、素より傳説にして、正史に據れるにわらず。厨子の前に常燈あり。不消の燈明と稱す。又内陣の東方に厨子あり。善光夫妻及び善助の木像を安置す。之

を三卿と稱す。此他、寺内に堂塔末寺頗る多し。又境内七千三百餘坪を限りて公園とす。

會式は毎年、舊曆三月十五日及び十月十五日にして、又十月十二、十四兩日を以て大法會を行ふを例とす。



善光寺

相四間二尺四寸、文様又四天工の懸を安置す。之を入外は本堂也。  
 三王門の奥に三の門あり。高六丈六尺八寸、深十一間一尺三寸、梁  
 南に本門あり。之を入外は五門あり三王門あり、之は大本願なり。又  
 北の文井、世々お輝なり。  
 弘法大師の大本願(新土宗)といふ。大本願は紫衣を指し、皇親御は華  
 天皇甲子の草履あり、之を履せる僧を大僧(天台宗)といふ、  
 宝蔵山善光寺は、長理郡長理市の北に大峯山の麓あり。天啓

善光寺

木曾山林

木曾山林とは、信州の西南隅なる西筑摩郡の、木曾川流域に屬する地方山林の總稱にして、東西凡十里、南北二十里、面積凡三十一萬町、良材凡八百三十六萬餘本を有する大森林なり。

此森林、往古は全山悉く喬木繁茂して、所謂斧不入なりしも、中古以來、道路漸く開通し、人口次第に増殖するに従ひ、板子年貢の制ありて、到る處是より斧鉞の痕を見ざるなく、爲に頗る全林荒廢の徴を現せり。後、享保年間に至り、尾州徳川家の所領に歸するに及び、大いに力を森林保護に用ひしを以て、全山始めて面目を一新し、爾來、伊勢大神宮毎二十一年の御造營には、紀尾兩家より、必ず該山林の樹木を伐採して用材に充てたり。然れども猶、文政の末年に至る迄、年の伐木數三四萬本を超過する事なかりしに、以來復濫伐の弊起り、明治初年に至る迄、年々十四五萬本を伐出せり。されば亦少しく全山の荒廢を來し、も、今は官の保護周到なれば、舊の盛大に恢復するも、蓋遠きにあらざるべし。

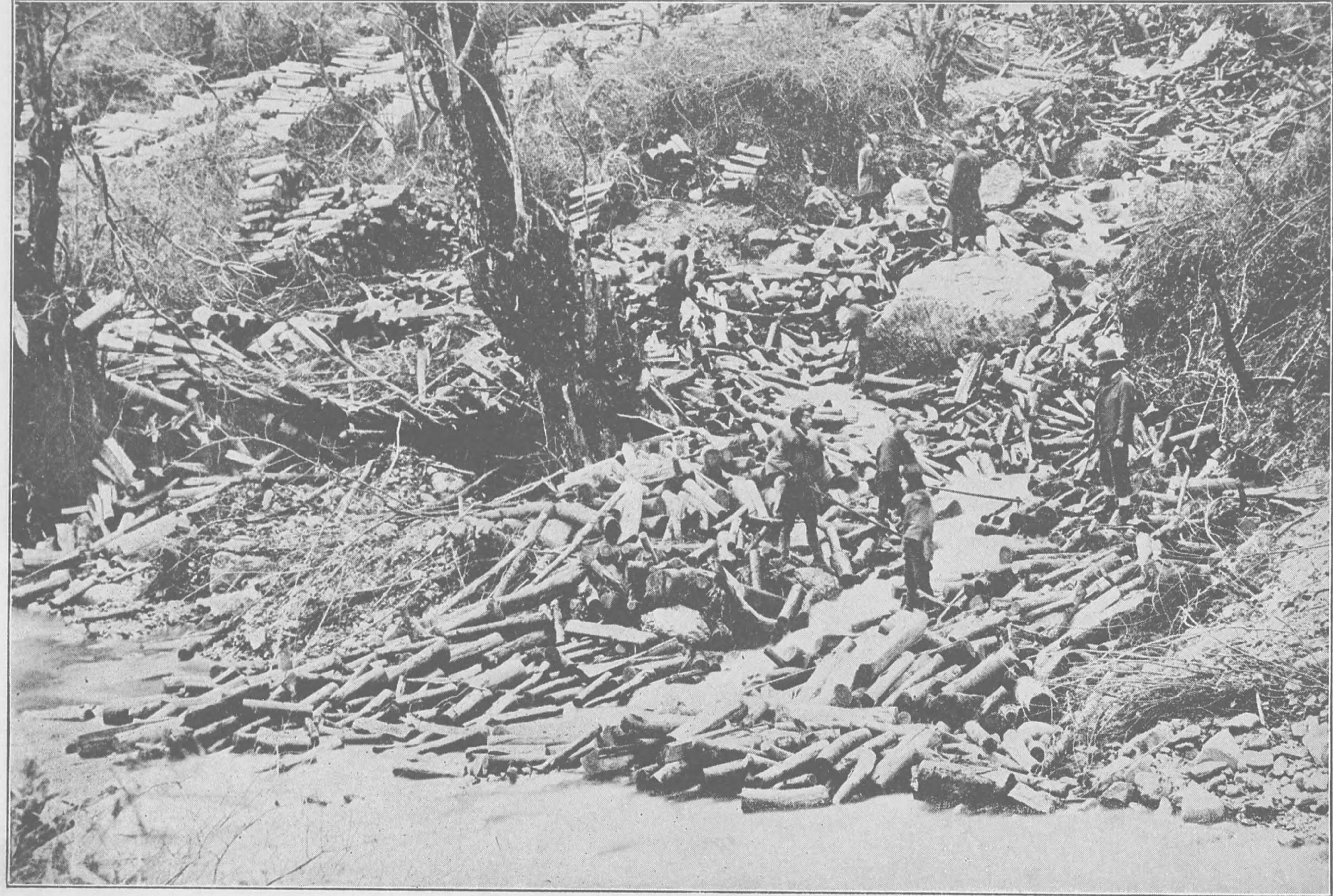
樹木の種類は五十種に餘るも、最も多きは、舊制禁伐の檜、樺、羅漢柏、花柏、金松の五種にして、就中、檜を第一とす。

山中にて伐倒したる木材は、其材の前後に鐵輪を嵌入して破碎を防ぎ、圖に示せる如く、堆積せる箇處より、山中凡そ千八百六十四條の巨川細流に下し、之を利用して濃、尾、勢の諸州へ流下せしむ。

之を爲すには、大抵、川幅三間深五寸以上の水を得れば、堰を作りて材を運ぶに足ると云ふ。堰とは材を構へて水を溜溜せしめたる者にして、段々に之を作り、材木をして或は流れ、或は敷木の上を滑下せしむ。而して水の深且大なるに従ひ、堰の距離も亦次第に遠かり、竟に巨川に達するなり。故に諸川、水源より十町乃至二十町を下れば、堰を作り得べしと云ふ。

多更せり。嶺、亭尉平開し至り、鼠所嶺川案の浪論ヲ編せるヲ又ハ、  
 して、脛る嶺虽も、峯嶺の瘠さ見ゆる多々、嶺ヲ越る全林荒蕪の嶺  
 以泰、蓋瀧浦ノ開蕪シ、人口大策ヲ欲するヲ嶺心、嶺于平貢の傭木  
 此森林、昔古ハ全山悉々喬木繁茂シタ、浪蕪奈不入今ノト、中古  
 貞林凡八百三十六萬餘本ヲ存せる大森林ナリト。  
 大山林の嶺縣リシタ、東西凡十里、南北二十里、面積凡三十一萬圓、  
 木會山林ヲ、計嶺の西南隅なる西嶺嶺の、木會川流其ノ風せる此

木會山林



木 會 山 林

伊勢神宮

内宮は、伊勢國度會郡宇治、五十鈴川の川上にあり。掛巻も畏き。天照大神を齋き奉れる大宮にして、御神體は、八咫の御鏡にましまし、垂仁天皇の二十六年冬十月、此處に鎮座し、より、今に至る迄、實に一千九百五年の星霜を経たり。

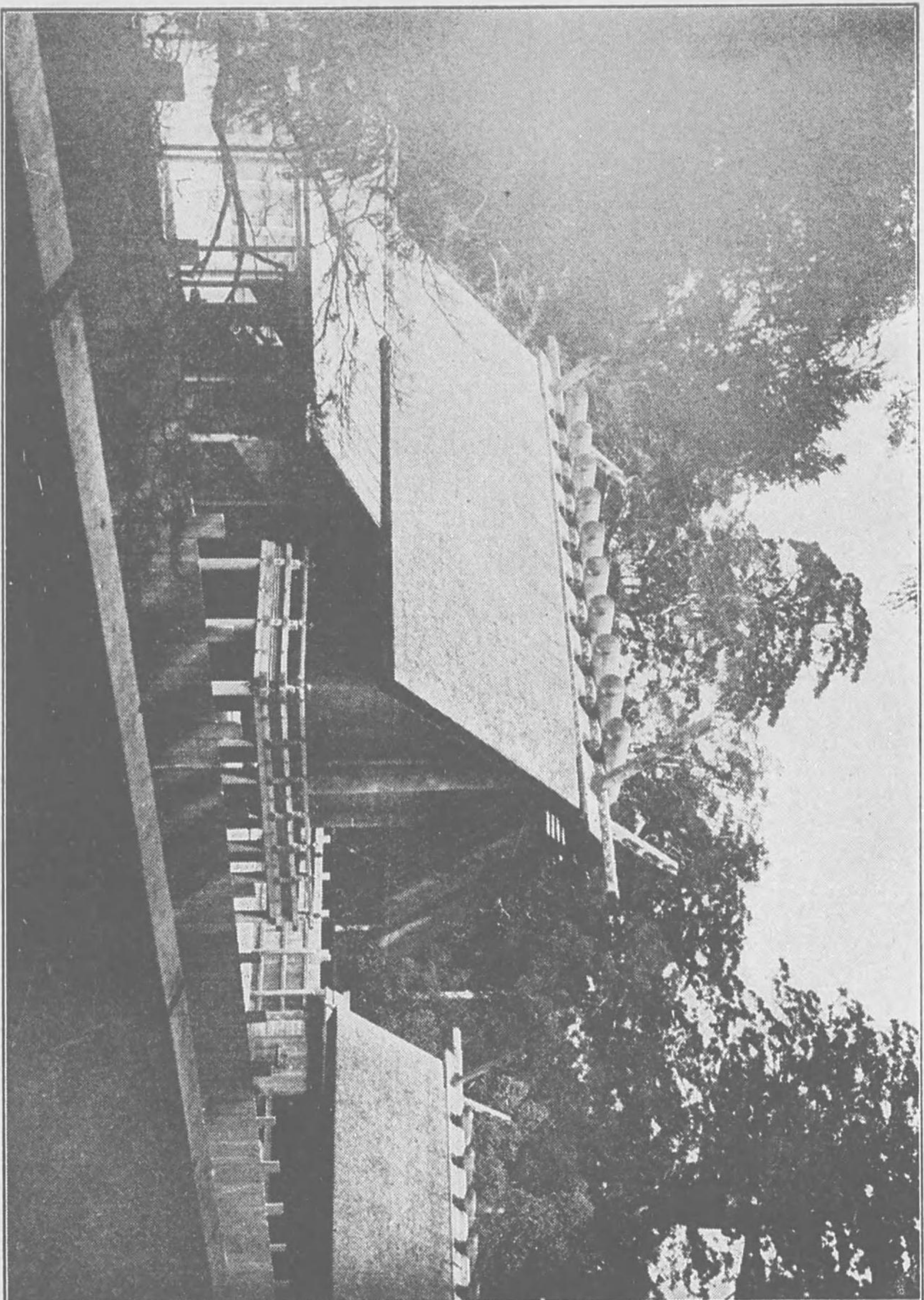
宮城六十七町餘、附屬神苑九千六百三十餘歩ありて、老杉古檜鬱々として天を摩し、神路山より流れ來る御裳濯川、その裾を繞り、神代ながらに制して宮殿は、いくつとなく、高天の原に千木高知り、底津岩根に宮柱太敷きて立たせ給ふ。今その宮殿其の他重なる建物を擧ぐれば、御正殿を始として、東西寶殿、四丈殿、五丈殿、外幣殿、御酒殿、忌火屋殿、御稻御倉、外玉垣御門、内玉垣御門、蕃垣御門、瑞垣御門、御贄調舎、内中外御廐、神樂殿、神宮司廳、大麻授興所、行在所等あり。猶、別宮として、荒祭宮、風日祈宮あり。其他、攝社廿五座、末社十六座あり。御造營は、天武天皇以來、毎二十一年と定められしが、一昨年、恐れ多くも失火ありしが爲、俄の御營造あらせ給へり。

外宮は、度會郡山田の原にありて、高倉山の麓に接す。豐受大神を齋き奉れる大宮にして、雄略天皇二十二年九月の御鎮座なり。

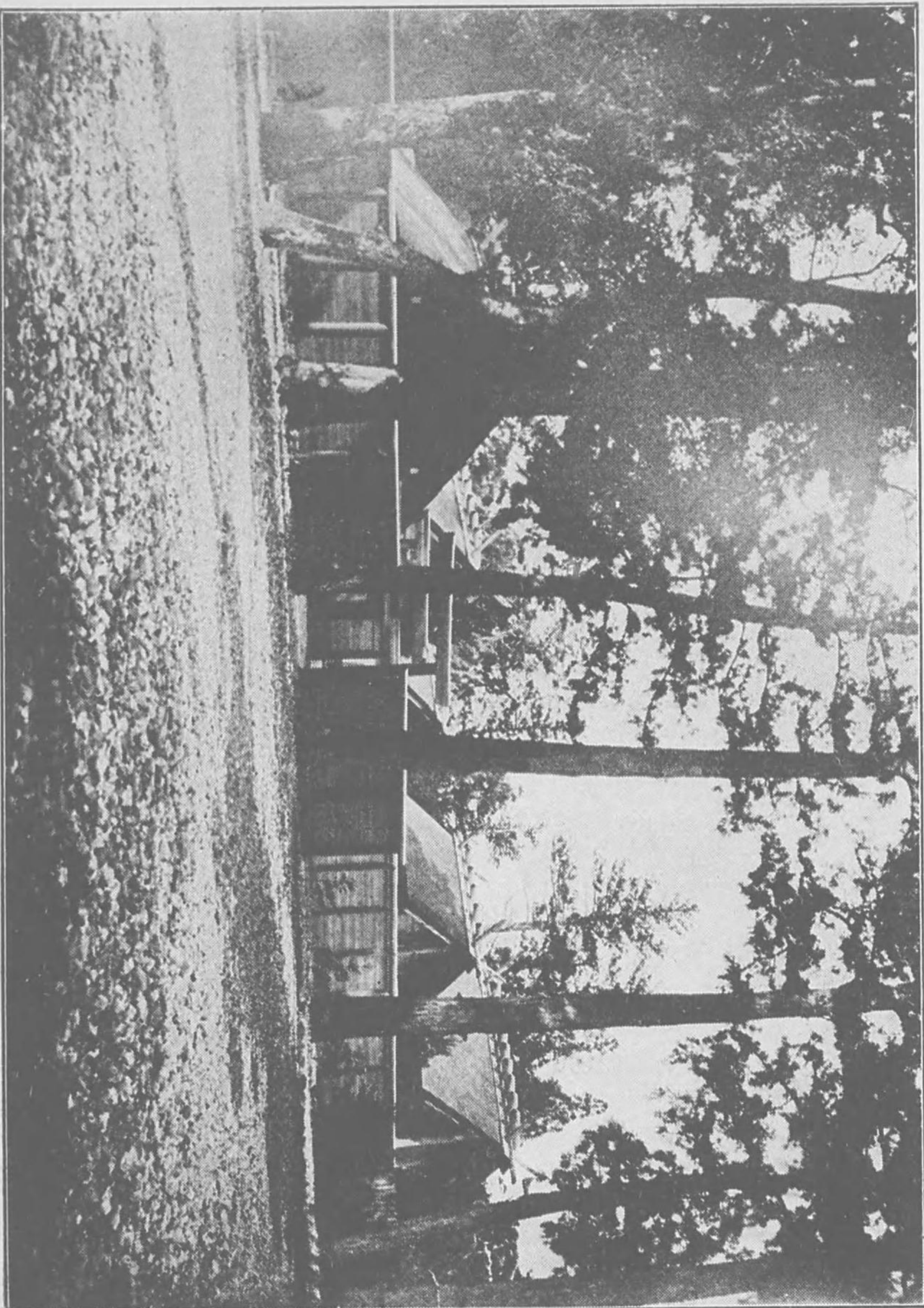
抑々この御神は、百穀發生の原素を掌り、天下の民に衣食を幸ひ玄給ふ御神にして、元丹波國比治の麻奈爲原に坐し、が、雄略天皇の二十一年十月朔日、天皇の御夢に、天照大神の御託宣ありて、豐受大神を我が坐す國にもがなと誨へ給ひしにより、天皇畏みて、直に大佐々命をして、豐受大神を麻奈爲原より迎へて、翌年九月望の日に、此大宮地に鎮め奉り給ひきと云ふ。されば歴代の御崇敬、また、宮殿等も、總て内宮と變らず。猶、外に多賀宮、土宮、風宮、其他、攝社十六座、末社八座あり。宮城は八十一町の廣きに渡り、猶之に續きて神苑一万五千餘歩あり。

皇野皇の宮... (The text is dense and partially obscured by the page's gutter and bleed-through from the reverse side. It appears to be a historical or geographical record related to the 'Imperial Wild Field' or 'Imperial Palace' mentioned in the header.)

母養軒宮



宮 内



宮 外

三條大橋

三條大橋は、京都三條通にて加茂川に架せり。長五十六間、幅四間半餘。四條、五條の兩橋と俱に、京都三大橋と稱せられ、其の京師の中央に位して、京都諸街道の起點となり、又元、東國交通の要衝に當りしを以て、名稱最も天下に聞ゆ。

初め天正十八年、豊臣秀吉、其臣増田長盛をして本橋を架せしむるや、勞費を吝まらずして工事を盛にし、橋柱六十三基、皆花崗石の圓柱を用ひ、基底地中に没すると五尋、又欄干の擬寶珠は諸侯の寄附する所に於て、造るに紫銅を以てせり。而して明治十四年之を修築するや、復その石柱及び擬寶珠を襲用せしを以て、今尙、十八基の擬寶珠に鏤めたる『洛陽三條橋、至後代、化二度往還人、磐石之礎入、地五尋。切石之柱六十三本。蓋、於二日域、石柱濫觴乎。天正十八年正月日、豊臣初之御代。奉行増田右衛門佐長盛造之。』の銘及び寄附諸侯の姓名を讀むを得るなり。橋の東西には、旅館、龕を駢べ、旗亭檐を接す。橋上仰ぎて東山を望めば、三十六峰翠色滴り、嬌として笑ひ嬌として語らむと欲す。是都人が最も得意として誇稱する所の風光なるべし。西は遙に禁闕の巍然たるを拜す。橋下は夏時、棚を淺瀬に架し、紅燈翠簾以て涼客を待つ。

加茂川は源を愛宕郡の北端雲ヶ畑に發し、水上村を過ぎて、石川或は蟬の小川の稱あり。上加茂、下加茂を経て、糺の森の南、河合に至りて高野川と合し、京都の東部を貫流して桂川に注ぐ。河床大抵砂礫にして、瑠璃の如き淺瀬潺湲とし流れ、東山と相待ちて山水の美をなす。三條四條河原の夕涼、夏の錦襖子、冬の水喜鵲、鴨川晒等は、皆京師の名物たり。

養費を容れし工事を爲し、跡林六十三基、昔林園子の園林を  
 跡の天五十八年、豊田泰吉、其田畠田具を以て本跡を築きしむる  
 こと以下、谷蘇景と天可の間  
 央に於て、京港瀬川並の跡を以て、又元、東園交並の要所を當  
 籍。四新、正新の兩新を以て、京港三大新を築きしむ、其の京新の中  
 三新大新は、京港三新並に、其並川に架せしむ。其五十六間、跡四間半

三新大新



三 條 大 橋



嵐 山

洛西に山あり。歌仙俊成嘗て曰く、又たぐひあらしの山と。河あり。右府師方嘗て曰く、傳聞天下勝地者、莫レ過大井河と。此山此河相待ちて山水の觀をなす。洵に天下の奇勝と謂ふべし。

嵐山は山城國葛野郡にあり。丹波の國境に連亘する、所謂西山の一部にして、西北の小倉山龜山等より重疊せる巒峯、こゝに至りて山勢漸く開け、大堰川を隔て、嵯峨野に對す。

大堰川は上流を保津川と稱し、丹波より發し、水尾、清瀧の諸川と合し、猿飛、龍門、大瀬等を経て乃て大堰川となる。下流を桂川と稱し、宇治川に合ひて淀川と成る。

嵐山の麓、大堰川に架せる橋あり。渡月橋と稱す。長百餘間、頗る風致あり。

抑々この地は京師に近きを以て、其勝名夙に天下に聞えしも、亭子院(宇多天皇)の大井河行幸、白河法皇の三船の御遊等の頃は、未だ花を以て賞せられず。櫻は後嵯峨院仙洞を龜山に營まれし時、吉野より移して、多く此邊に植ゑさせ給ひしなりと云ふ。爾來、春は一段の

風色を添へ、幾朶の白雲一帶の青山に溢れて、瑠璃の如き清流に浮ぶ狀、繪も詞も能く及ぶ所にあらず。此あらしの山の名、げに空しからずと謂ふべし。又、秋晩の候、滿山の紅葉、松栢の翠と相錯映して、丹青の妙を盡すも奇觀なり。

此邊、名所舊蹟多し。則、嵯峨野に仲國塚、小督塚、小督櫻、三軒茶屋あり。橋を渡りて櫛谷神社あり。河の右岸を上りて千鳥淵、大悲閣、了意碑(角倉了以は水理家にして、此の川あり。又山中に戸難瀬、法輪寺、藏王堂、西行櫻、等あり。

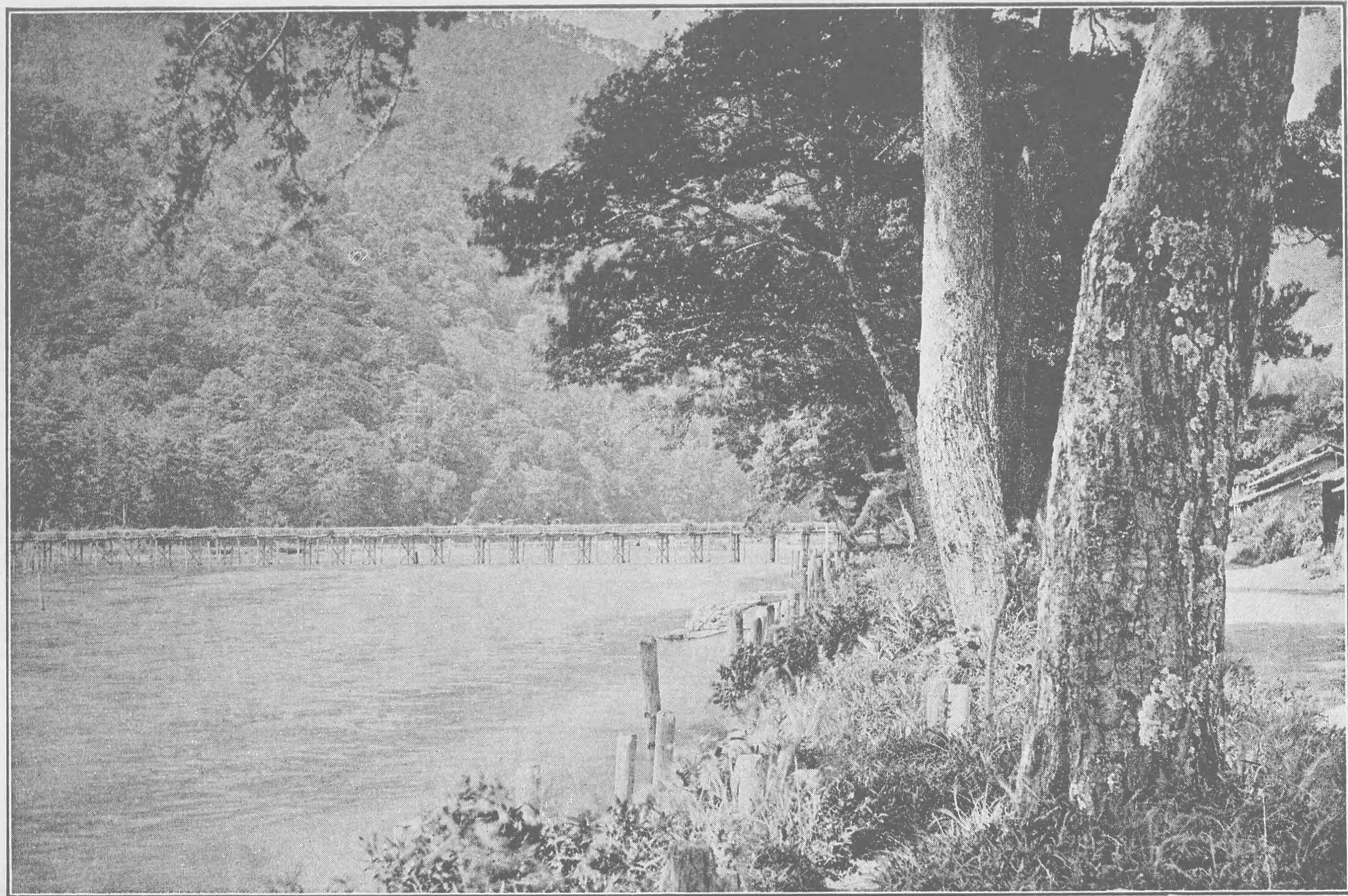
藤原俊成  
頼山陽

またたぐひあらしの山の麓で杉のいほりに有明の月

奉母嵐山 第四回 板輿未到已花開 春風畢竟舊相識 留取殘紅待我來

大野川は土流を帯びて川を成し、其流ももろく、水尻、青龍の流川は合  
 流し、大野川を隔て、熱地裡に流す。  
 又、西井の小倉山、山麓にも重疊せる巒峯、その下に至りて山麓漸  
 嵐山は山嵐の靈裡にあり。其地の園境は甚且る。洞窟西山の一帯  
 さら山木の隙にあり。其天への香烈を請ふべし。  
 寺前大菅の曰く、朝開天不烈此香、莫大共阿、汝山此阿味香  
 當西山の曰く、燭山翁曰く、曰く、又式うんわとこの山。阿あり。

嵐山



嵐 山 渡 月 橋

和歌の浦

和歌の浦は南海無双の名勝にして、和歌山縣名草郡にあり。和歌山市を距ると一里。南に向ひて一小灣を爲し、東西二十餘町の間、海濱一帶砂白く松緑に、江水洋洋として翠巒と相映す。則ち東方には名草山高く聳え、半腹なる金剛寶寺(紀三井寺)の鐘聲は殷々として遠く響き來り、東南には生石が峯連なりて、藤白の御阪翠巒高く、麓には冷水浦、鹽津浦の港賑ふ。又西南は、蒼海漫々として千里涯際なく、近く沖の初島地島に、海布刈り潮汲びを望むべし。

妹背山にあり。又其左方に見ゆる旗亭を蘆邊茶屋と云ふ。妹背山とは此灣中の一島嶼にして、玉津島祠の前に位し、蘆邊茶屋の前岸より、三斷橋といふ石橋を架して通す。其狀宛も相の江の島の小なるが如きも、風光の佳は之に倍す。多寶塔は釋迦、阿難、迦葉の三佛を祀り、慶安二年の開基なり。又蘆邊茶屋とは、古來有名の旗亭にして、蘆邊屋、朝日屋の二亭を總稱す。

此他、玉津島明神、窟祠、臈山、大相院、伽羅山、望海樓及び千疊敷の古趾、東照宮、天満宮、觀音堂等、みな和歌の浦沿岸の名所たり。往昔 聖武天皇、神龜元年十月此地に幸して、其風光を愛で、弱瀨の名を改めて明光浦と稱せられ、山部赤人への唱和して和歌を作りし以來、世々の詞人騷客が賦咏、實に枚擧に遑あらず。而して就中、野田好古が長篇の詩は、之を述べて遺憾なきを以て、左に掲げて參考に供す。

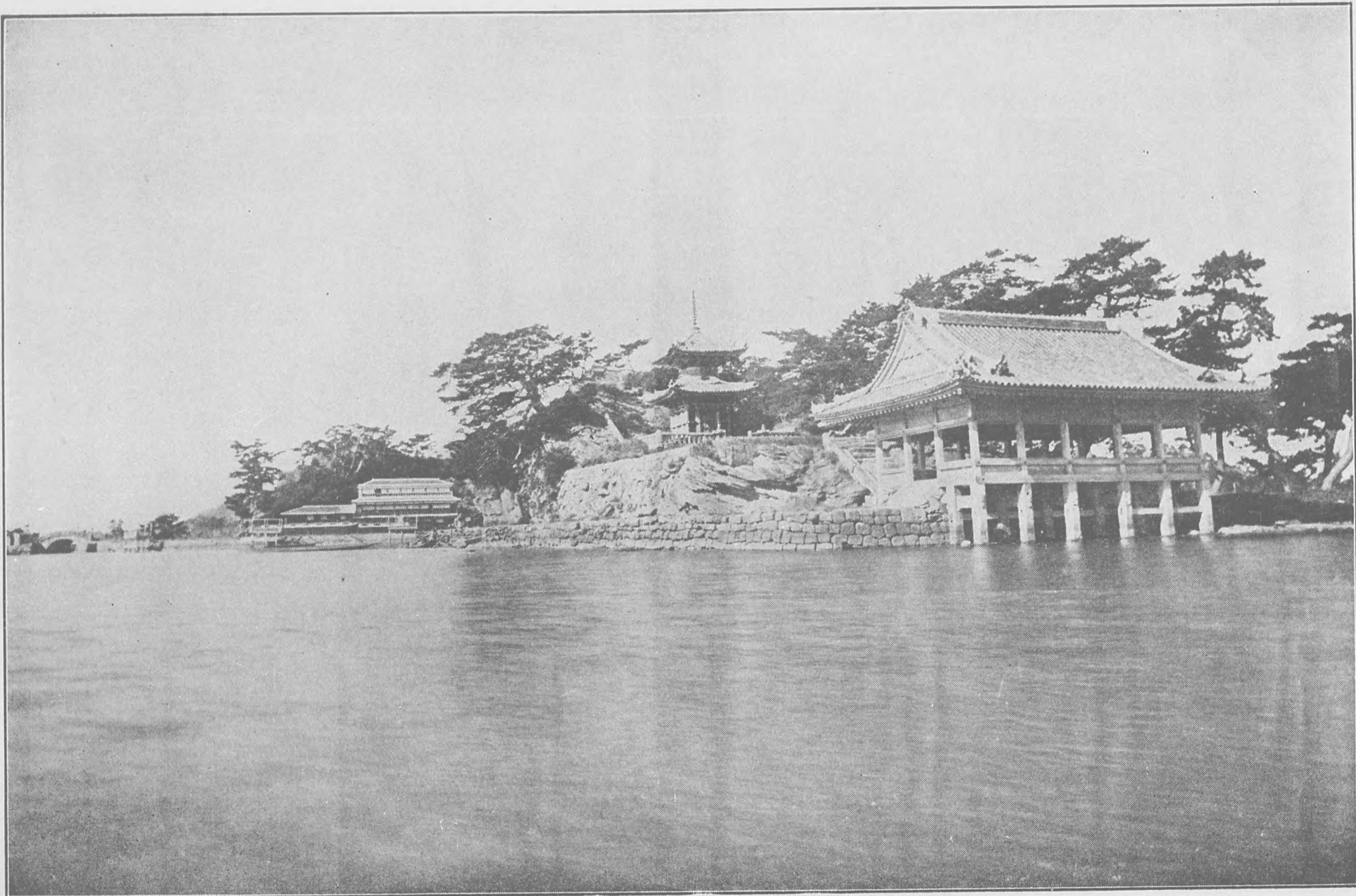
遊弱浦

野田好古

弱浦標三勝境、壯觀天下奇、靈嶽孕寶符、功極二儀、二儀高下學遠眸、南吞三峯、接十洲、激浪噴雪動地軸、嵌空雲帆變狎舟、指頭淡島青一朶、天柱想望幾千秋、玉島鐘秀駕龜背、留戶松徑彩雲浮、春樹長凝仙仗色、翠葦消息空悠悠、神祖宮殿摩蒼天、駕雲石燈排星躔、昇平久沐至治澤、本支百世日月懸、菅公祠廟欽威靈、蒼翠深籠古松烟、宵叶空傳袞龍補、一時文獻永赫然、金剛遙望望海樓、環洲夕漲擁岸邊、野樹津亭遠共布、斥鹵渺渺接鹽田、石橋穹窿臥長虹、嵯峨繞路轉開琳宮、松汀鶴唳沙嘴雨、葦岸人倚酒旗風、龜巖貌石相向背、恍望飛閣聳雲中、雲中奇觀無端倪、臨泛容與或板躡、探甃剩得十洲趣、瓊樓瑤閣耐可杼、秦皇求仙徒航海、穆王周遊風四蹄、若便海槎得相通、神眩空噓當時臍、勝境可賦趣可樂、胸中山水元領畧、山中爭衡來奏奇、陶室爲之漫磊落、壯觀難極奇中奇、幾回欲賦筆相闕

岸の味高岬島に、海赤い隙及び望む。岬島、巖野の巖々として千里を眺め、浪  
 音、巖野の巖々。又西南に、蒼巖の巖々として千里を眺め、浪  
 來り、東南に主石の峯巖あり、瀬白の岬岬巖高、巖の巖々  
 高く聳え、半里ある金剛寶寺(三井寺)の巖巖が巖々として巖々聳え  
 巖巖白く巖巖、其水峯々として巖巖と岬岬。岬岬東大に各草山  
 を理るる一里。南に向ひて一小巖あり、東西二十餘回の間、巖巖一  
 味高の巖は南巖巖の巖巖として、味高山巖各草巖あり。味高山市

味高の巖



浦の歌和

姫路市

姫路市は酒井雅樂頭(十五万石)の舊城下にして、東西三十町、南北廿五町、市坊一百一、人口三万四千二百五十五、戸數、九千五十三(第十八統計年鑑)地勢、西に書寫山聳え、東に市川流れ、南は飾磨津に接し、山陰山陽兩道の要路に衝り、山陽鐵道の貫通するあり。又舟楫の通ずるあり。爲に海陸の運輸ともに頗る便にして、商賈繁盛、人煙稠密、播磨國中第一の都會なり。物産は革細工、高砂染を以て最とす。

城郭を白鷺城と稱す。市の北方姫山にあり。東西十町、南北八町、中央に五重の天守閣あり。屹然として半空に聳え、之を望むに甚だ壯觀なり。

抑々此城は、貞和年間、赤松圓心の二男筑前守貞範の創營にして、嘉吉元年赤松氏滅亡するに及び、山名宗全の所領に歸せしが、應仁元年、赤松政則之を奪還し、舊例に従ひ、小寺氏をして世々城主たらしむ。

然るに天正五年に至り、小寺官兵衛孝隆(即、黒田(如水也)羽柴秀吉に降り、城を獻せしを以て、秀吉此に移り、全九年、三重の天守閣を築く。(後世

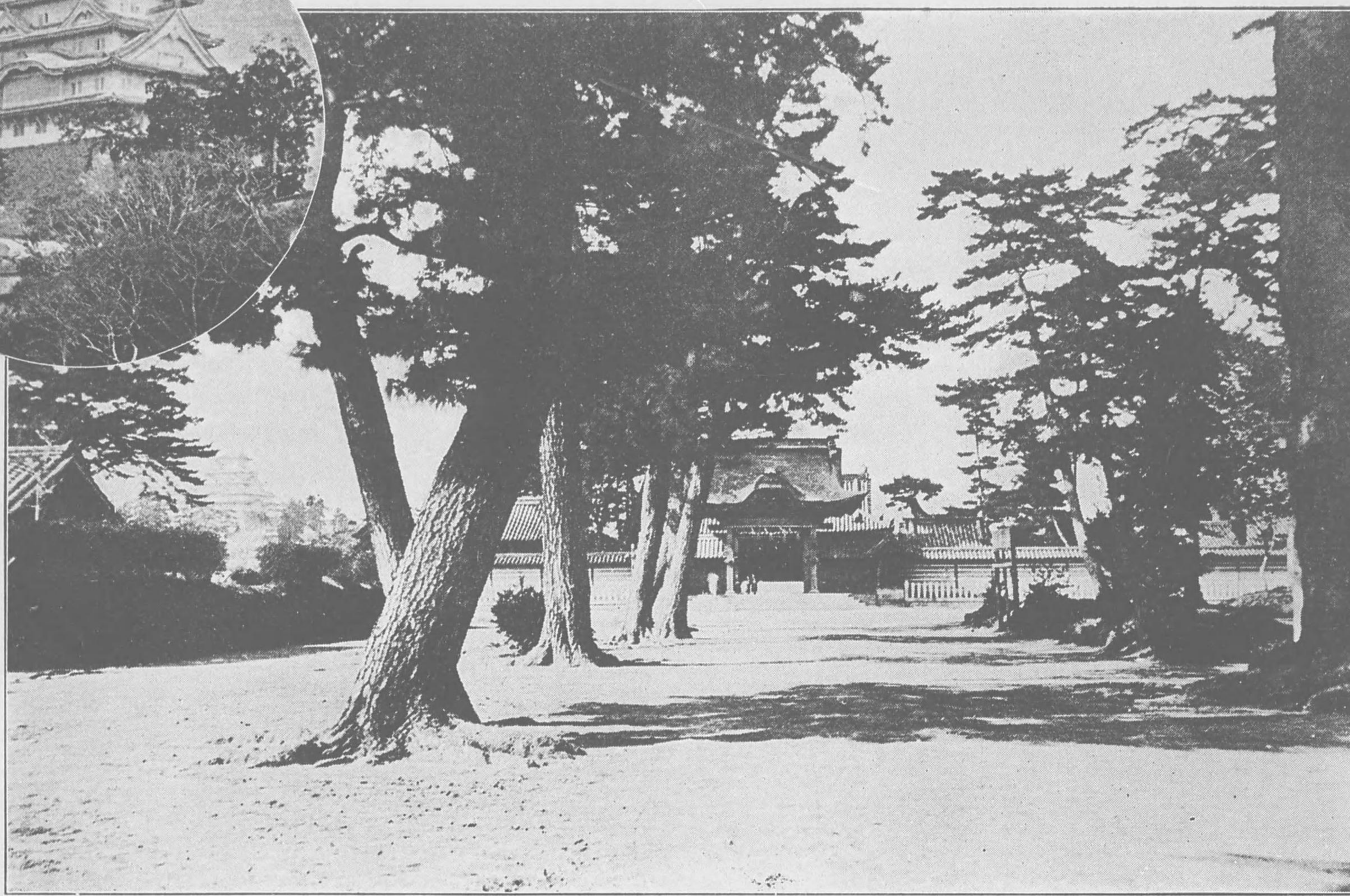
太閤丸)後、羽柴秀長、木下家定等の居城となりしが、慶長五年に至り池田輝政、當國を賜はりて、居城を此に定むるに及び、大いに櫓郭を再營し、又、姫山の麓なる宿村、中村、國府寺村の三村を併せて姫地

と號け(後姫路)次で全十三年、五重天守閣の工を起し、九年にして成功す。結構頗る雄偉壯麗にして、粉聖高く中天に輝き、永く播陽の偉觀となる。而して、元和三年、池田氏封を因州鳥取に移されし以後、榊

原、其他諸侯の居城となり、屢々交代を経しが、寛延二年、酒井雅樂頭忠泰封を此に賜はりし以來、復轉封の事なくして、明治の廢藩置縣に至れり。城内今は、第十師團の所在地たり。

野宮 縣國中第一の藩會なり。藩政の革職工、高御衆を以て是の  
 の蘇せるなり。鶴ヶ崎の蝦蟇もとり敵ふる勇に、商賈繁盛、人  
 遊し、山割山割兩儀の要領に、山割蝦蟇の貫蘇するなり。又、東  
 十八餘信半儀、此處、西に青森山登文、東に市川流、南に輪廻轉り  
 正西、市街二百一、人口三万四千二百五十五、只、此千五十三(業  
 磯濱市が町共銀樂座(十五式下)の藩城下り、東西三十四、南北廿

磯濱市



城 露 白 路 姫

欠

新 潟

新潟港は越後國北蒲原郡の東北端に位し、信濃川の河口にあり。舊は壬生田と稱し、一砂嘴に過ぎざりしが、桑滄の變により、土地漸く開け、明暦年間に至り、漁民等、隣里原村より移住す。(當時始めて草莽を川、伊藤の三家)後居民の増殖するに従ひ、漸く交通の便を欲し、遂に萬治中、縦に三横に五の溝渠を鑿ちて、信濃川の水を引く。船隻の便、是に於て始めて自由なるを得、商賈の繁盛日を遡うて進み、殊に明治の御代に及びては、外國互市場及び縣廳所在地となりしを以て、殷賑更に一層なり。然れども、惜哉、港内、信濃川の流砂堆積して、水深僅に一仞乃至四五仞に過ぎず。又風浪を防ぐべき便なきを以て、到底今日の大船巨舶を容るゝに足らず。従ひて、貿易も極めて微々たり。

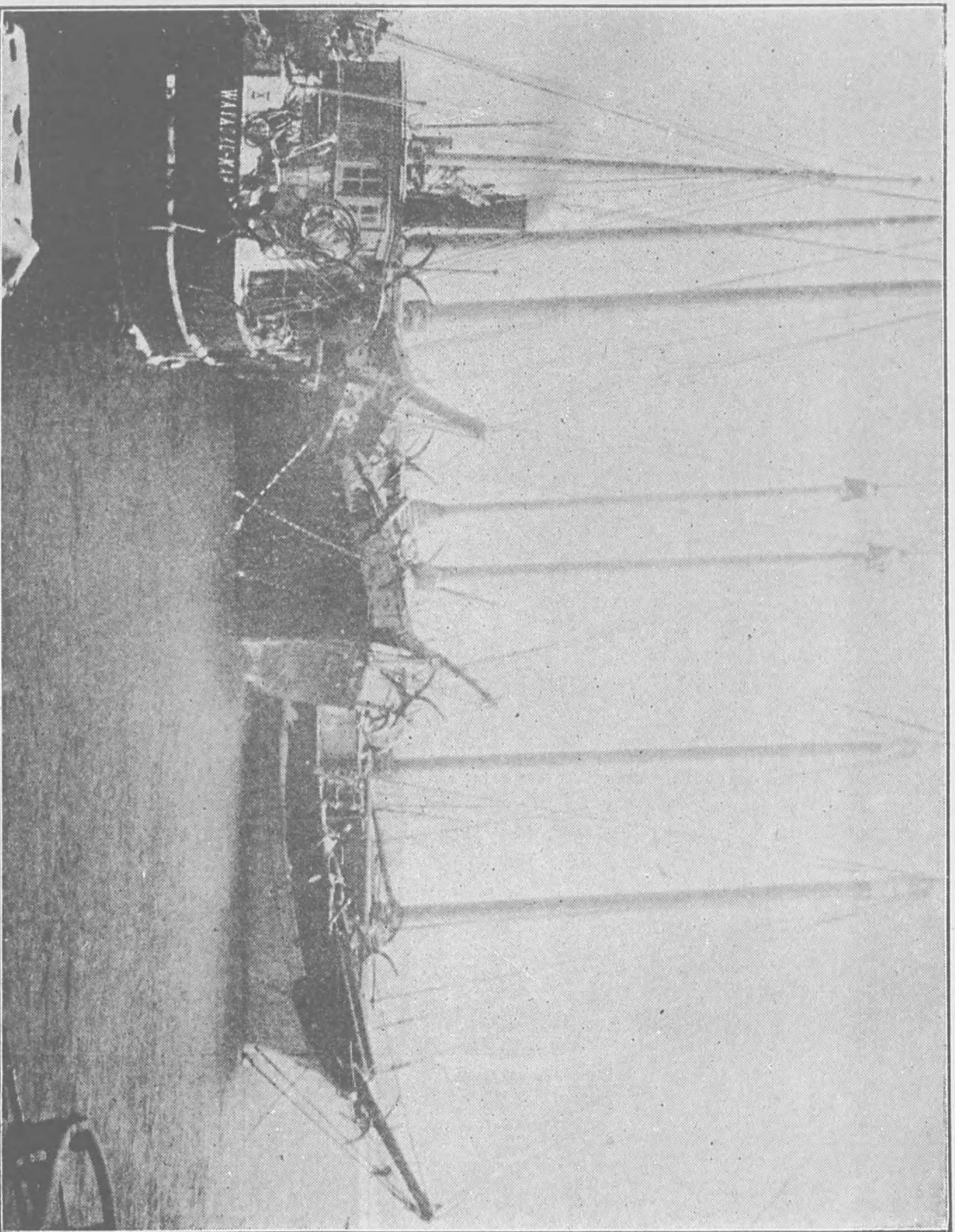
市街は、市坊二百五十一、東西十五町、南北二十五町、戸數一萬六十八、人口五萬千四百五十四(第十八統計年鑑)あり。市中最も繁華なるは、本町、古町通にして、其他、東仲通一番町には縣廳あり。西堀通には市役所、警察署、郵便電信局あり。學校町には師範學校及び病院あり。緑町には税關あり。又市の南端には白山神社及び公園あり。西南には招魂社あり。北端には日和山あり。皆市の勝區にして風景に富み、四季の遊覽に適す。

雪は古來越後の名物にして、他州の人は、本市の如きも、三冬九旬の間、毎に雪中に埋没する者の如く想像すと雖、これ甚だ當らざる想像にして(高田地方其他山間に在りては、一)本市の如きは、割合に降雪少く、決して二三尺を超ゆるとなし。

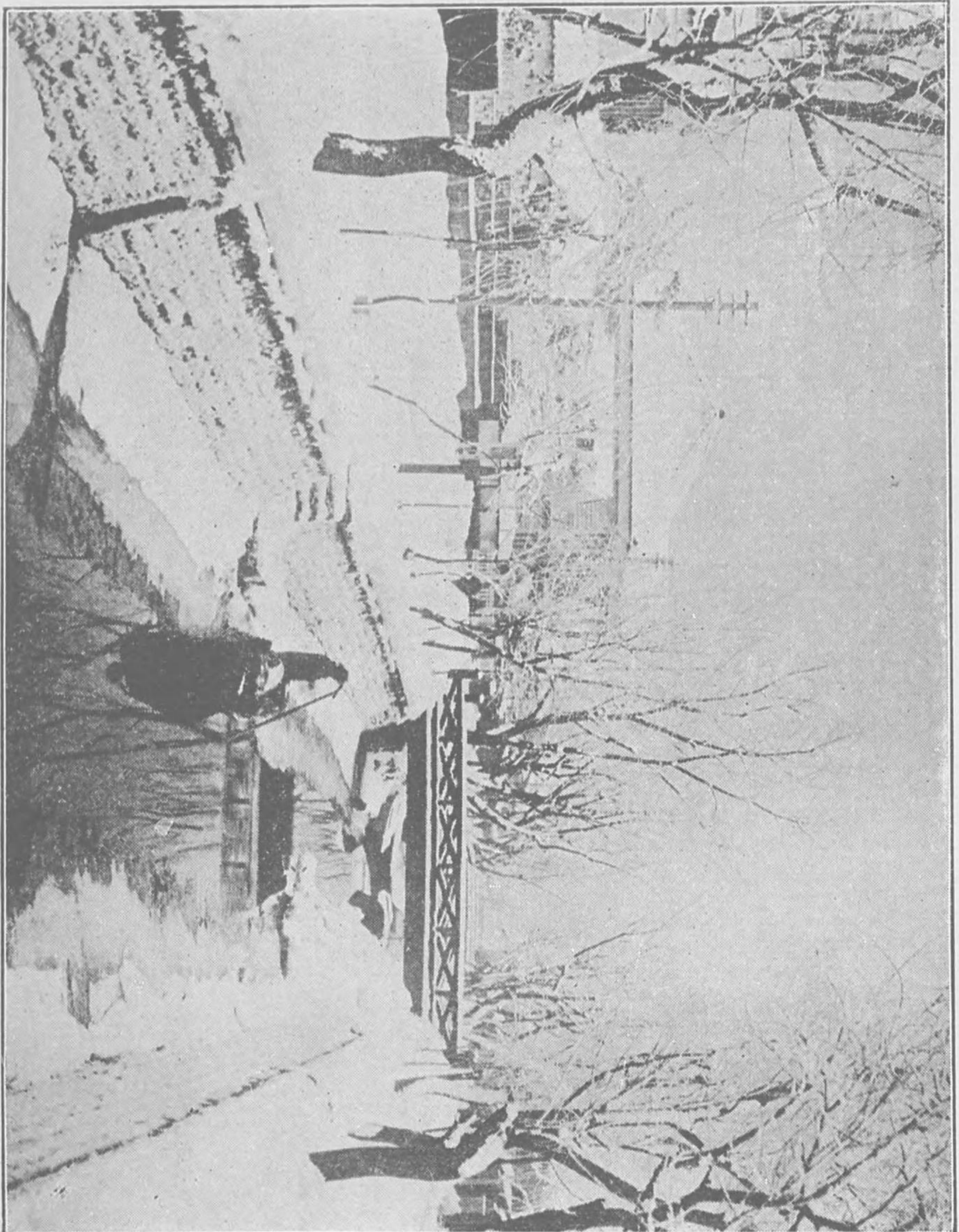


引越りて自由なるを待、商賈の繁盛日と爲りて、蘇我、新羅、百濟の  
 中、蘇我三韓の王の朝貢を蒙りて、言靈川の水を引く。蘇我の野、基  
 川(言靈川の三津)の源流の世に於て、漸く交通の便を爲し、蘇我高野  
 村、即ち平間に至り、蘇我野、新羅野林より移す。(蘇我野と新羅野  
 王と田と蘇我、一蘇我野と蘇我野と、桑倉の蘇我野より、土田前へ開  
 港、蘇我野と蘇我野の東に蘇我野、言靈川の河口にあり。昔は

蘇我野



新 鴻 港



新 鴻 市 (積 雪)

鳥海山

鳥海山は羽後國飽海郡の北境に聳ゆる高山にして、海面を抜くと六千九百尺、峭拔天を凌ぎて、他山の遮り覆ふなく、山頂常に雪を戴き、之を望むに、其形、毫も富士山と異なるなし。

之を躋るに三路あり。一は吹浦よりし、一は蕨岡よりし。一は由利郡の矢島よりす。俱に行程六里許なり。

山頂に大物忌神社あり。國幣中社にして、豊宇氣毘賣命、若宇賀賣神等を齋祀す。國內屈指の舊大社なり。

又、絶頂に二個の休火坑あり。貞觀三年に噴火し、爾後、數々水蒸氣を噴出せしも、今は休火山に屬す。

湯澤町は、秋田市を距ると二十四里十八町にして、全國雄勝郡の中央にある一都會なり。郡役所、警察署、郵便電信局等の官署あり。又、養蠶製絲の業盛なると、州内無比なるを以て、稍々繁華の市街なり。

愛宕山は湯澤町にあり。縣社愛宕神社を奉祀す。満山櫻樹を以て掩はれ、花時の風光、北地に稀なる盛觀にして、全地方の士女が遊樂の地たり。圖に載する所は、即この山上より、遙に天の一方に、清冽千秋の雪を戴ける鳥海山を望みし者なり。

の夫島より。野行路六里程あり。

之を廻るに三谷あり。一は旭前よりし、一は瀬岡よりし。一は由味津

を望びし、其流、臺も富士山も異なるなり。

此百尺、龍対天を窺て、山頂の巖を登る、山頂常り雪を覆ち、之

鳥嶽山は陸奥國鹽竈郡の井ノ口に在りし、其面を越くは六千

鳥嶽山



鳥 嶽 山

釜 石

釜石町は岩手縣南閉伊郡にあり。濱街道の驛次にして、市坊五、戸數約一千、人口約六千を有し、郵便電信局、警察分署等あり。稍々繁華の小都會なり。

釜石港は市街の東に位し、東經百四十一度五十四分八秒、北緯三十九度十六分三十秒に當り、東西九町、南北十五町、灣口の尾崎、間蛇崎、南北より斗出して囊の如く海水を包み、水深三尋乃至八尋、隘小の嫌なきにならずと雖、亦、船舶の碇繋に便ならざるに非ず。

市街を西に距る二里餘の山中に、有名なる釜石鐵鑛床あり。字を、前山、新山、靦の澤、大仙山、垂水、瀧の澤、硫黃の洞、元山、佐比内、細越、瘠駒、男嶽等と稱し、田中、大橋、橋野等の製鐵所より製出する銑鐵は、年々六七千噸を下らず。而して一説に據れば、該鐵鑛床に有する鑛量は、大凡五千萬噸にして、今、鑛量より銑鐵を製出する割合を、平均五割八分とすれば、之より生ずる銑鐵の量は二千九百萬噸と成る。即ち一年の産出銑鐵量を五萬噸とすも、尙、約六百年を支ふるに足るべしと云ふ。實に我邦の一大富源と謂はざるべからず。

傳へ言ふ。文政十三年、南部彌四郎の家臣石掛仁左衛門、始めて此處に坑口を穿ち、鐵鑛を採掘せりと。後、嘉永安政に至りて漸く發達し、文久の頃には、採掘所の數四箇所及べり。降りて明治八年に至り、官之を買収して、全所鈴子に一大製鐵場を起し、釜石港には棧橋を架し、之より大橋山及び小川木炭山に鐵道を敷設し、全十四年、諸準備完成せしを以て、翌年三月より銑鐵鑄製に着手せしが、設計其の宜しきを得ず、全九月に至り忽ち廢止せり。其諸器械工場及び鑛山俱に、東京京橋の人田中長兵衛氏、之を襲うて、今や盛に鑄製に従事す。

ぶきりぬるすも難、亦、離島の郵便の便なるを以て非ず。  
 南非より引出し、露の味、海水を回す、水害三層に至る、銅小の銀  
 銀十六位三十位に當り、東西北側、南非十五位、橋口の鼠、間諜、  
 釜石市街の東に對し、東緯百四十一度正十四分八秒、北緯三十度  
 の小橋會水あり。  
 緯一千、人口六千を計し、海軍部計鼠、警察役署あり。郡と繁華  
 釜石市街の南に開港あり。露海軍の砲台あり、市街正、月樓

釜 石



釜 石 港

耶馬溪

耶馬溪とは、豊前國下毛上毛兩郡の間を劃して北流する、山國川兩岸の稱にして、元は山國谷と呼びしを、賴山陽一たび之を文字に上すに臨み、其の雅ならざるを嫌ひ、改めて今の如くせり。蓋、國音、山、耶馬、相通するを以てなり。

山國川は源を彦山に發して東南に流れ、守實に至りて東北に轉じ、宮園に至りて北向し、梯阪に至りて山移川に會し、河原の細流を容れ、曾木に至りて跡田川を合し、樋田を過ぎ、屋形川を引き、北流して上毛下毛兩郡を隔斷し、中津の西に至りて海に入る。其の曾木以南數里の間、鐘山の山臺、川脉を挟みて並馳縈回し、十有三村、山を負ひ水に臨みて其間に散布し、二豐の通路は水に沿うて走る。之を過ぐるに、群峯水を夾みて千巖競ひ秀で、水流岩に激しては湍となり、飛沫珠璣を散じ、停りては淵となり紺碧を溶かす。其の平濶なる處は田園離落として、道路橋梁其間を點綴し、神祠佛閣は叢樹の杪に超伏し、野店驛舎は深草の間に隱見す。其の山谿相迫り、巨巖横峯して行路を遮斷する處は、山腹を鑿ちて墜道を通じ、廂を穿ちて明を取る。而して愈々進むに従うて、山態水様千變萬化し、人をして端睨に暇あらざらしむ。賴子が之を海内第一と謂ひしも、亦誣ひざるなり。羅漢寺は耶馬溪の北端跡田村にあり。曹洞宗の巨刹にして、堂舎を山に据し岩洞に據りて構へ、山を鑿ちて洞壑橋梁の狀を爲し、岩を削りて釋迦、五百羅漢、千躰地藏等の佛像を作る。石佛の數總て三千七百躰、造營の巧妙、人をして驚嘆に堪へざらしむ。此は僧圓龜照覺の作る所にして、北朝の曆應年中に成りきと云ふ。

會木に至りて楓田川を合し、餅田を越え、皇紙川を下り、井流して土  
 園に至りて井向し、林洞に至りて山藤川を會し、阿原の味流を容り、  
 山園川を越え、香山を越して東南を流り、中實に至りて東井を轉じ、宮  
 味流するを以てなり。

謂ふ、其の源をいざらば、嶺の、池をて今の味くせり。蓋、園音、山、源、  
 の、源にして、元は山園谷を源にして、嶺山園一がむきを文字にして、  
 源流をいざらば、豊前園下土手兩源の間を流して井流する、山園川兩源

眞 嘉 野



豊前國耶馬溪羅漢寺

宮崎神宮

官幣大社宮崎神宮は、日向國宮崎町の北、大宮に鎮座あり。皇祖神

武天皇を奉祀す。境内廣からず、神殿壯宏ならずと雖、老杉古松亭々

として神さび自ら人をして畏敬の念を發せしむ。而して殊に、去年

神武天皇御降誕大祭の爲に、神宮の近傍の江平町は取擧げられ、其

の草葺の如きも、多く瓦に改めて面目を一新し、神苑の泉石を整へ、

其入口より神前へは、一直線に道路を改修し、兩側には植うるに櫻樹

數千株を以て玄たれば、花時の風光言はむ方なく、又、陳列館を新築

し、社務所をも改修したれば、壯嚴舊に倍せり。

史家は云ふ。舊史に、神武天皇の東征以前宮居之給ひし高千穂宮と

稱するは、此宮崎の大宮なるべし。そは宮崎神宮舊記に、筑紫の鎮守

神八井耳命の御子天健磐龍命、天皇の宮所の蹟に御社を建て、其御

靈を鎮め祭り給へり云々。職原抄に、神武天皇即位之初、繼三神代之蹟、

都日向國宮崎宮、云々。大和風土記に、檀原郷、土地中肥、民用不

少、是即、神日本磐余彦天皇、自日向國宮崎一始宮居地也、云々。

日向風土記に、宮崎郡、當郡上肥、民用繁多、出奇石鮮魚貝甲紙麻

等、古老傳云、此地自三皇孫降臨、至神日本磐余彦天皇之宮所也、故

云宮崎、云々。などあるを證とすべく、又其地形を相して察すべしと。

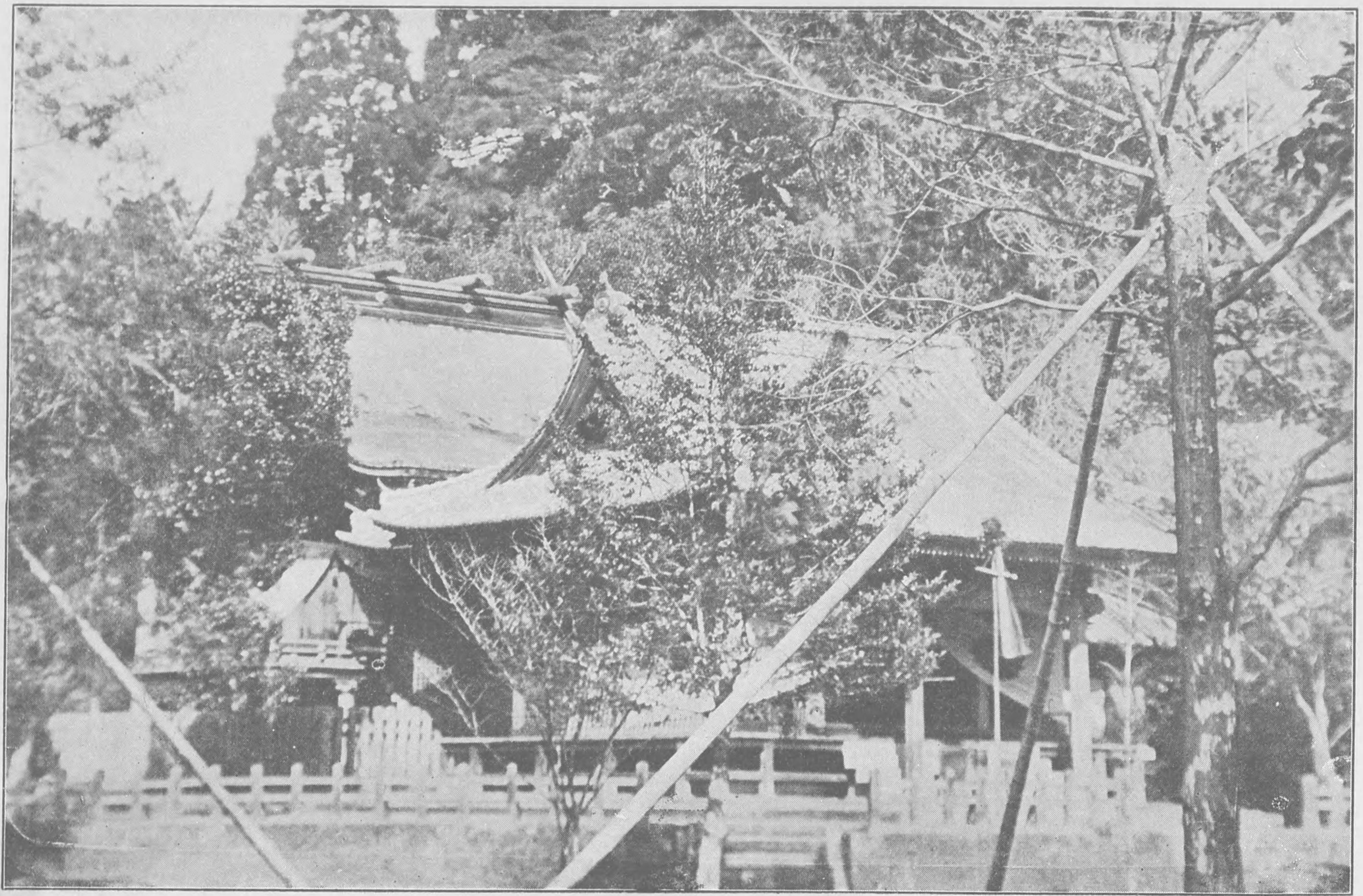
記して讀者の參考に供す。





其入口より軒前へは、一直線に並べた池邊、兩側には並べた石燈籠の草間の成りとも、全く其の如くして面目を一様し、軒張の泉石を整へ、軒瓦天皇降御大祭の爲に、軒宮の張替の爲に平田に建替りて、其のしつと軒を自ら人をして異様の念を懸せしむ。而して概し、先年天皇降御奉承す。畿内風俗を、軒張張替るる事と雖、若くは古時亭の宮大抵は御神宮は、日向國宮御所の非、大宮に建替りて、其の御神宮

宮神軒宮



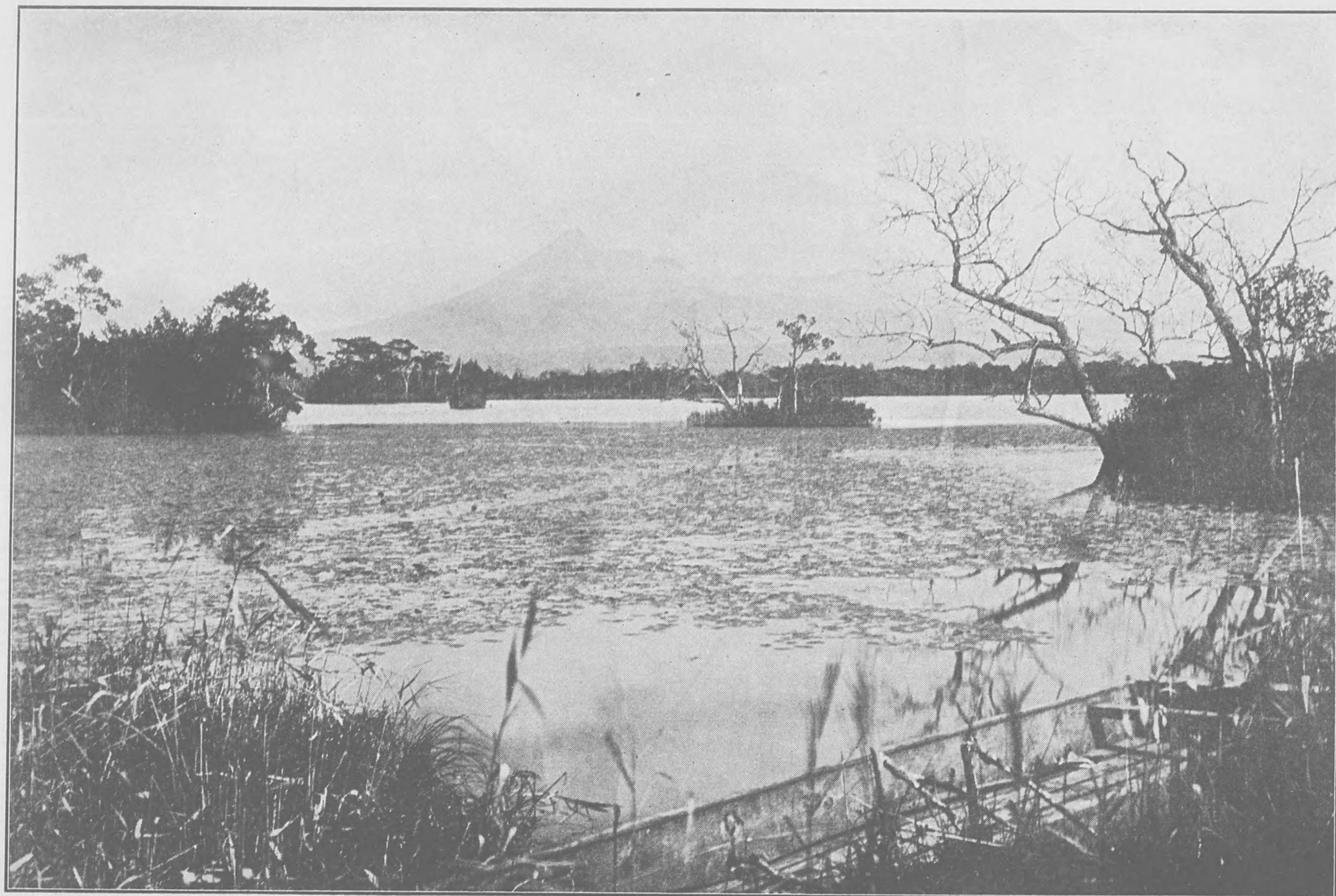
宮 神 崎 宮 社 大 幣 官

駒ヶ岳

北海道には火山甚だ多く、其山脈は、遠く魯西亞のカムチアツカ半島に  
起り、千島列島を経て、根室北見の境に入りて、硫黄、斜里、西別等  
の諸岳を噴起し、雌雄兩阿寒岳より、北見、釧路の國境に沿うて北彎  
山系(一名樺太山系と稱する古世紀山脈にして、樺太島に起り、宗谷岬より南走して、北見  
天鹽兩國の境界を爲し、千島火山脈を貫きて、十勝日高の境界を奔り、襟裳岬に至り  
て海に)と交叉し、十勝石狩の境上にては夕張岳、膽振の境上には、  
樽前、白老の諸岳及びマツカリ岳(即、一名を後方羊蹄山と稱する者にして、海を  
抜くと六千五百三十尺、美麗なる圓錐形を爲  
し、蝦夷富(土の稱あり)の如き高山を噴起し、火山脈は此に集滯して與市、勇拂、有  
珠、美國、等の諸岳となり、神威岬を出だす。而して、是より更に南  
方に走る者は遊樂部岳となり、遂に半嶋部に出で、地形に従うて、少  
しく噴火灣に向ひて彎曲し、渡島の東部に於ては大川岳、駒ヶ岳、惠  
山等を噴起し、西部に於ては河汲峠、千軒山等を噴起す。(此兩山脈は略  
に函館山一名臥牛山尊えて、本道第一の良港を爲す)  
駒ヶ岳は一に佐原岳または内浦岳と稱す。渡島國茅部郡宿野邊村の東  
砂原村の東南にあり。同國龜田郡に跨がる。高三千二百二十尺、嘗て  
寛永十七年六月及び、安政三年八月廿六日に噴火せしとあり。  
尊菜沼は、駒が岳の山麓に於ける數箇の沼池の一なり。廣袤は著し  
からずと雖、沿道にゐると、風色に富めるとを以て名あり。

山系（大體國國の境界を成す）千島火山帯を貫き、十割日高の境界を養ひ、嶺麓に至り  
 谷間大山系を辨する古世跡山形に於て、嶺太島に臨み、宗谷郡より南に於て、外見  
 の諸島を環峙し、嶺麓兩國寒岳より、外見、險阻の國境に密して外嶺  
 嶺、千島原島を辨す、嶺麓外見の嶺入りて、嶺麓、餘里、西原嶺  
 外嶺嶺より火山甚だきく、其山脈が、嶺々魯西亞のペムマママ半島に

嶺々岳



嶺 野 嶺 岳 嶺

臺灣の蕃族

臺灣の蕃族に生蕃熟蕃の區別あり。是舊、本嶋が清國の所領たりし時、支那種族の政教に風化せず、常に之を敵視し、性猛烈にして漁獵を事とする蠻族を、生蕃と稱し、穩和にして農牧を力め、外人と交通するを嫌はざる蕃族を熟蕃と曰ふなり。臺灣蕃族は、多くは全島の中部を縦貫する山脈に沿うて、高地に棲息し、蕃社の數百を踰ゆと雖、之を大別すれば、左の四種族より成る者の如し。

第一、バイワン種族 軀幹偉大にして皮膚銅色を帯び、性猛獯にして鬪争を好み、人を屠り其肉を啖ふ。常に中央山脈の高地に棲み、野獸を捕へ、旁ら牧畜を營む。衣服は、膝掛の如き物を以て胸部及び脊部を蔽ひ、鹿皮の上衣を着る。

第二、デボン種族 バイワン種族と大同小異の蠻族なれど、身軀稍と小にして、氣質も亦幾分か温和なり。衣服は脛衣と胸當を用ひ、寒冷の候は牛皮の外套を着し、又文身する風あり。常に河海の岸に住みて漁獵する者の外、平原に在りて耕作を業とする者及び、木工金工等あり。

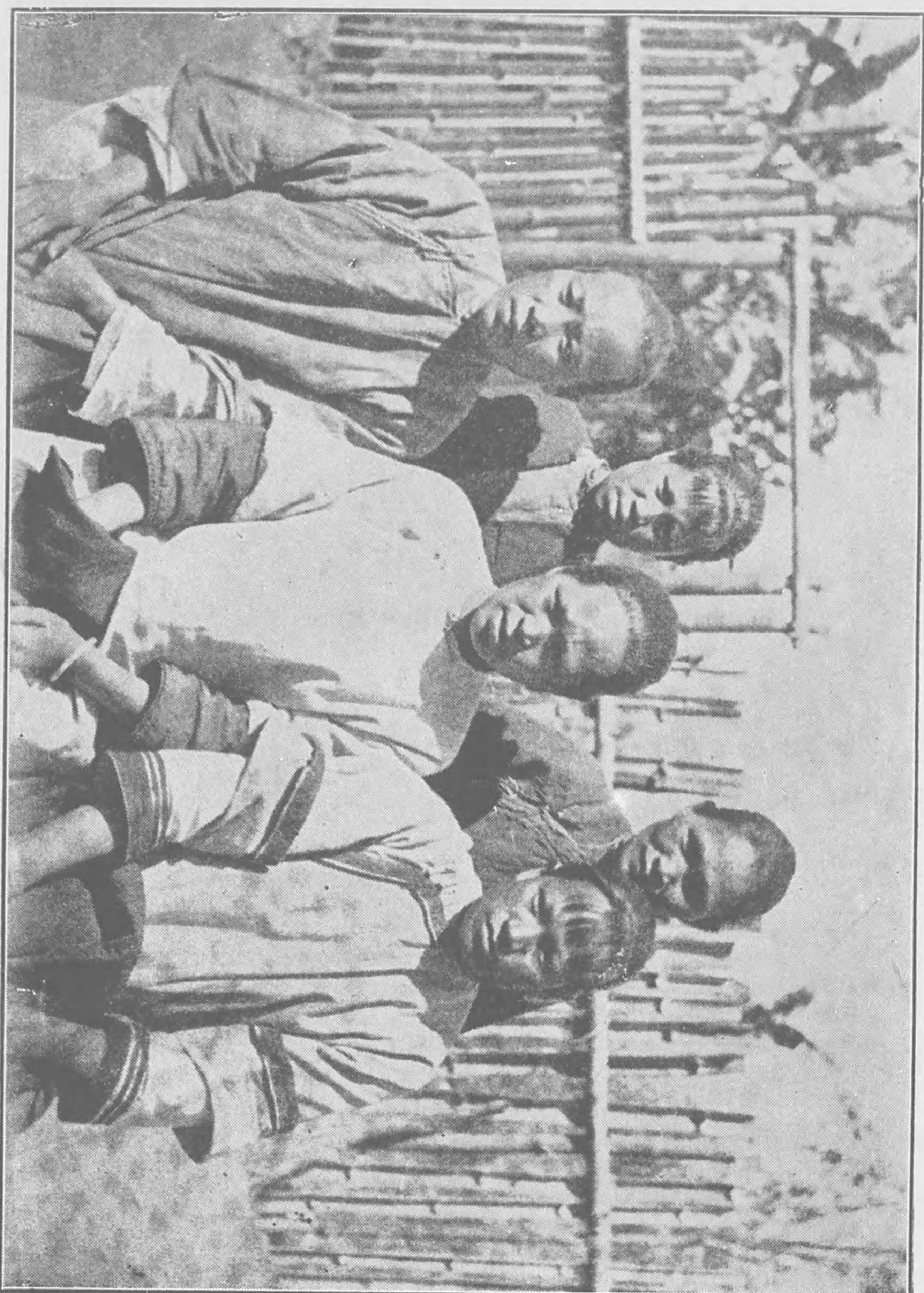
第三、アミヤス種族 漂流者の子孫にして、前の二族に後れて來住せし者なりと云ふ。全身多毛にして筋骨發達し、新年祭の如き、稍々進歩したる風俗あり。然れども、他の蕃族は之を外人視して、對等の交際を爲さず。以上の三種族は所謂生蕃なり。

第四、平埔蕃族 所謂熟蕃にして、體格強壯性質温良、能く農漁を力め、島の南部及び西部に住し、支那種族、其他外人等と雜居するを嫌はず。尙、生蕃熟蕃の相違は、圖に就いて其大躰を察すべし。

某人類學家は、本島の蕃族を區別して、四群八族二十一部と爲し、八族をアマイヤル、ヴォヌム、ツオム、ツアリセン、バヨワン、プユス、アミス、ペイボ、とせり。尙、異論夥多なるべし。然れども、一々之を論ずるは、小紙面の許さざる所なるを以て措く。

第一、シトマン種族  
 の賦  
 一、蕃社の樓百を銅のり籠、之を大眼せしが、法の四蕃社より知る者  
 臺灣蕃社が、全くな全島の中流を鐵貫せる山祖の部こそ、高祖の對息  
 を継がざる蕃社を煉蕃と曰ふなり。  
 多かる蠻社を、土蕃と稱し、蘇味のしつ異社を代々、外人と交誼せる  
 支那蠻社の近邊に風介せず、常に之を嫡脈し、其蘇麻のしつ熊鷹と肆  
 臺灣の蕃社が土蕃煉蕃の淵源あり。是書、本勳の毒國の神諭をいし朝、

臺灣の蕃社



臺 中 縣 蜈 蚣 嶺 庄 熟 蕃



臺 中 縣 生 蕃

明治三十三年六月十五日印刷  
 明治三十三年六月廿十日發行

定價金八拾錢

著者 野口保興

東京市本郷區西片町  
十番地

發行人 石川正作

東京市神田區鎌倉町  
二番地

印刷人 多田榮次

東京市神田區小川町  
一番地

發行所 東洋社

東京市神田區鎌倉町  
二番地



地理寫真帖  
 定價表

|        |        |         |
|--------|--------|---------|
| 製方     | 一      | 帙全四帙    |
| 特別上製附紙 | 金貳     | 圓金八     |
| 上製附紙   | 金壹圓四十錢 | 金五圓六十錢  |
| 並製     | 金八十    | 錢金三圓二十錢 |

全國大賣捌所

●東京、林平○水野○杉本○丸善○鶴喜○嵩山房○青野○大草○榑原○  
長島○東京機械製造會社○目黒○東海信文○北隆館○吉川○松邑○良  
明堂○服部○東京堂○上田屋支店○有斐閣○岡崎屋○中西屋○上原○勢  
陽堂○教育品製造會社○美滿津○田中屋○盛春堂○尾呂志屋○旭堂○大  
坂、吉岡○尙文館○名古屋、川瀬○永東○熊本、長崎○長野、西澤○鹿兒  
嶋、吉田○津、關西圖書會社○豐住○大分、甲斐○守田○佐賀、河内○福  
岡、積善館○森岡○久留米、菊竹○和歌山、三宅○山口、桂○廣島、積  
善館○岡山、武内○高松、宮脇○松山、土肥○高知、澤本○德島、坂井  
○神戸、吉岡支店○松江、川岡○鳥取、藤谷○宮崎、津野○京都、村上○  
松田○岐阜、郁文○仙台、高藤○藤崎○豐橋、豊川堂○金澤、宇都宮○福  
井、品川○富山、中田○高岡、學海堂○甲府、柳正堂○靜岡、吉兒○濱  
松、谷島屋○沼津、文林堂○橫濱、田沼○千葉、多田屋支店○浦和、高野  
○水戸、川又○前橋、煥乎堂○宇都宮、内田○松本、水琴堂○高美、上  
田、西澤支店○諏訪、宮坂○高野町、高見澤○長岡、目黒○松田○福島、  
漸進堂○山形、五十嵐○酒田、白崎○秋田、成見○横手、大澤○増田、  
東海林○弘前、今泉○盛岡、便益舍○函館、魁文舍○札幌、菅間

東海林●弘前、今泉●盛岡、便益舎●函館、魁文舎●札幌、菅間



|    |
|----|
| 87 |
| 35 |

終

